Nagoya City University

翻刻　名古屋市蓬左文庫蔵「幸若音曲本」（六）

―元服曽我・入鹿・日本記・笛の巻・文学―

服部幸造

（承）翻刻　名古屋市蓬左文庫蔵「幸若音曲本」（一）―夜討曽我・信田・十番切・大臣―（名古屋市立大学人文社会学部研究紀要　第9号　二〇〇〇年十一月）

翻刻　名古屋市蓬左文庫蔵「幸若音曲本」（二）―兵庫・はま出・清重・俊寛・新曲・やしま―（名古屋市立大学人文社会学部研究紀要　第10号　二〇〇一年三月）

翻刻　名古屋市蓬左文庫蔵「幸若音曲本」（三）―安宅・一満箱王・景清―（名古屋市立大学人文社会学部研究紀要　第11号　二〇〇一年十一月）

翻刻　名古屋市蓬左文庫蔵「幸若音曲本」（四）―未来記・腰越・鞍馬出・馬揃・高館―（名古屋市立大学人文社会学部研究紀要　第12号　二〇〇二年三月）

翻刻　名古屋市蓬左文庫蔵「幸若音曲本」（五）―伏見常繁・小袖乞・しつか―（名古屋市立大学人文社会学部研究紀要　第13号　二〇〇二年十一月）

（元服曽我）

文治元年正月十三日の日鎌倉殿。箱ねまふてとそ聞えける。去間はこねには。かまくら殿の御参とて。大衆ころもを用意し。児のいしやうをけつこうす　〔サシクトキ〕その中に河津の三男箱王との。衣装の事をはたしなまて。ようちてはなれしちゝこの事。今のやうにおもはれて忍ひのなみた。せきあへず　〔コトハ〕こしの式部を近付。いかに候しきぶとの。鎌倉殿の御前に我は出仕を申ましい。それをいかにと申に。祖父伊藤の入道（1オ）

との。謀叛人なりとて。御とかめのありし事。世にはかくれも候らはす。式部殿とそ仰ける式部此よしきくよりも。さも候らへ。これ程大衆けつこう候に。余所なから御見物候らへかしはこわう殿とそいふたりける。箱王とのはきこしめし。さらはけんぶつせんとて。かまくら殿の御参り今やいつやと相待る。さる間かまくらとの。御登山まし〳〵て。高堂にこもらせ給へは。大名高家の人々は。大庭ひろえんに所せきなくなみゐたり　〔サシクトキ〕其中に箱王（1ウ）

との。式部大部を供として。けでんのかうしのきわまて出　〔フシ同〕さもあれかたきの助恒と。名のみ計は。聞けれと其。すかたをは。いまた見す。かたきをとはてとおほしめし。いかに候式部殿。鎌倉殿は。いつくにましまし。しきふとのとそとふたり。ける式部此よしきくよりも。大紋のさしぬきに。立ゑほしめされたるこそかまくら殿におはしませ。箱王殿きこしめし。をろかの人のをしへ事や。されはとてかまくら殿を。見そんすへきにはあらねとも。かたきを（2オ）

NII-Electronic Library Service

Nagoya City University

とはんかためそかし。助恒はととふならは。式部大ぶか心得て。あれそとをしゆる事あらし。八か国の。大名小名の名字を。とふて見んするに。助恒と云ものに。といあたらぬ事よもあらしと。まだいとけなき。御心にあんを。まはすそ。をそろしき　〔コトハ〕さてあの君の弓手の御わきに。なをられたるは誰さうそ。武蔵の国の住人に。ちゝぶの重忠と申人にておはします。さて又めての御わきに。なをられたるはたれさうそ。相模の国の住人（2ウ）

和田のよし盛候よ。扨又君の御まへに。中座に付てましますはいつくの国のたれさうそ。伊豆の国の住人。北条の四郎時政とて。きみの為には御しうと。其次に付たはたれさうそ。たしろの冠者のぶつらとて。是も伊豆には大名なり　〔カヽルツメ〕其つき〳〵はたれさうぞ。逸見武田小笠原　〔同〕一条板垣。南部下山みな付たりといひけれとあふ猶すけ恒ときかさりけり。さて又けてんのかうしを。きたむきにはらりと。ゐなかれたるは誰（3オ）

さうそ。あれこそさかみ大名に。ざんま本間土肥土屋遠江の国の住人に。したら長山。みなつゐたりと云けれと。猶すけ恒ときかさりけり。さて又げでんのかうしを。にしむきにはらりと。居なかれたるはたれさうそ。あれこそ信濃大名に。にしなたかなし。犬飼諏訪とのはら。こむろしろとり服部たう。皆ついたりとは云けれとも猶すけつねときかさるははこわうにつゝむかおほつかな　〔コトハ〕さては此度の御供をは。助恒は申さ（3ウ）

さりけるや。すけ恒御供〈ヲ〉申ならは。伊藤の太将にてある間ばつざにはよもあらし。さあらはかへらんとおもひしか。又立かへりとふたりけり。さてあの礼盤のきわに。薄紺染の直垂着て。さもゆゝしけなる大名はいつくの国のたれさうそ。しきぶこのよしきくよりも。横手をちやうとあはせて。今まてしろしめされぬか。あれこそ御身のためには。がんぜんのいとこ。九藤一臈助恒申す人にておはします

〔カヽルフシ〕はこわう殿きこしめし（4オ）

〔同〕ようこそ立かへり。とふたりけりと。思へは。ようちではなれしちゝごの事。今のやうにおもはれて。かたきなれともなつかしく。見とれて爰に。箱王殿ばうせんとしてぞ。立にける　〔コトハ〕何とかしたりけん助恒はこわうを見つけ。扇をあけて是へ〳〵とそまねきける。はこわう此よし見るよりも。かたきの呼かうれしさに。大せいの中をかきわけ〳〵とをりけり。すけ恒かそはへそよつたりける。すけ恒はこわうをひざの上にかきのせ。御（4ウ）

身のためにも。御一そくのかたはしとめしをかれ申たる。公藤一臈すけつねと申ものにて候か。はこわうとのの此寺に。ましますよしをうけたまはれとも。公方の隙のなき間。今まて御目にかからぬなり。これは見参のはしめなれは。しやうじんの御ために。にやはぬ引出ものにて候らへとも。いゐにつたはるてうほうとて。赤木のつかにしろかねの。目貫どうがねうつたりし。こさすかをとり出して。はこわう殿にそ引にける箱王このよし見るよりも（5オ）

。あらうれしや。かたきの手よりかたなをえさする事は。ひとへにはこねの権現の。いたさせ給ふ所なり　〔カヽカルフシ〕とつて引よせ

NII-Electronic Library Service

Nagoya City University

一かたなと　〔同〕おもひきりては。ありけれと。すけつねは。ふるつわものはこわうは。正年十三なり。うでかほそくしてきこめのうへを。とをすまし。とをさぬものならは。かまくらとのゝおめのまへ。大名小名の。御らんする所にて。親のかたきを討そんじ。めいどにまします河津殿。末代曽我の。うきなをくたさん事の。悲しさよ（5ウ）。とやせんかくや。あらましと。あんじわつらふその時刻。かまくら殿のお下向とて。大名小名。一度に座しきをはらりとたつ。すけつねも座しきをたつまのあたりなる。かたきをもうたて。すごすそむさんなる　〔コトハ〕其後はこわう学文所にかへり。たゝ此事をぞあんじける。ぬれはかたきか夢に見え。おくれは身にそふことくにて。がくもんもこゝろにいらざりけり。かくて日数をふるほとに十六になるはほともなし。曽我にまし（6オ）

ますはゝうへ。はこわうを法師になすへしとて。けさと衣を用意してはこねへのほせ給ひけり。十郎とのはきこしめし明日ははこわうか法師になるへきときいてあり。児のすかたを今一度。見はやとおほしめさるれははこねへのほり給ひけり。はこわういそき立出。すけなりを一間所へしやうじ申。なふいかに十郎殿。明日はさてはこわうはほうしになるへきよなふ　〔サシクトキ〕はこわう法師になるならは御身にたくう人あらし。さた（6ウ）

めてほうになるならは。一人は寺のすまゐをし。助成はさとにすみ給はゝ　〔フシ同〕かたきの九藤助恒を。何としてかはうつへきそ。十郎殿と。申つゝなくより。外の事はなし　〔サシクトキ〕すけなりきこしめされて涙を。はら〳〵となかしたまひ。あらあさましの事ともや。兄弟にゑんなきものを尋るにすけ成か身にとゝめ。たり。それをいかにと申に。京にまします小次郎殿は。みやこのすま居とましませは身の本望をかたりなくさむ事（7オ）

もなし。越後なるぜんじ坊は国はる〳〵にてをとつれなし。二のみやのあねこは女性の身。あるしるしも。ましま。さす。はこわうさへ法師になり　〔フシ同〕すけなりは。ともゝなぎさのうつせ貝。くたけて物をおもふとも。たれかあはれととふへきそ。箱王とのと。かきくとき又。はら〳〵と。なき給ふ　〔コトハ〕はこわう申けるやうは。其儀ならは里にくたりおとこになり。すけ成の御供を申へきか。たゝし男になりてのち。はゝ上の御ふけふもや候へき。助成（7ウ）

きこしめされて。あらうれしきおことか云事かな。御身おとこになりてのち。母うへの御ふけふ候とも。すけなりかあらん程はよきやうに申なをすへし　〔クトキ〕さあらはおもひたゝんとて。常の所にたち入。くわしき事を書留むる　〔フシ同〕なこりをは。〳〵。はこねのお山にとゝめをき。ふたつとなきいのちをは。めいとにましますちゝ河津とのに。たてまつる。師匠同宿人々に。名こりのかずはおほけれと。思ひたちぬる。旅ころも又。こそきてもあふへけれ。かへ（8オ）

す〳〵も名こりおしの。しきぶだいぶとかきとゝめ。夜のまにしのひて出にけり。はまへの宮を筋かひにやけいの露に。そぼぬれて曽我の。さとにそ。着にける　〔コトハ〕今は一日も児の姿でかなふまし。やかておとこになすへきか。ゑほしおやにはたれやの人を頼むへきそ。

NII-Electronic Library Service

Nagoya City University

しよせんおもひ出したり。当君の御しうと。北条殿をたのむへし。此儀はいしくも候。さりなからかちにていかゝ行へきとて。助成馬をひけいする。馬は（8ウ）

一疋なり。すり成馬を引まはし。のれや箱王。召れ候へ十郎殿と。兄弟馬をそろんしける。すけ成仰けるやうは。あら逆成おことかいひことかな。児をかちにてあゆませ。大ぞくの身にて馬にのり。路次をゆかふするほとにぎやくなる事のあるへきか　〔サシクトキ〕いかなる御事候そ舎兄を。かちにてあゆませ申。おとゝの身にて馬にのり。路次をゆかふするほとにきやくなる事の候へきか。めされ候らへ十郎殿

〔フシ同〕はやのれやはこわうと。兄弟（9オ）

。馬をろんしけり。時刻をうつし夜あけなは。大かたとのにもれきこえとゝめ。られては叶ふまし。はこわうとのも。のりたまへ。すけなりものらんとて。馬一疋に。兄弟のり。曽我のさとをそ出にけるしやうこも今も。末代もためし。すくなき。次第なり　〔コトハ〕兄弟の人々は。駒をはやめてうつほとに。北条のたちもちかくなる。馬場末にて馬よりおり。門外にこそたゝすみけれ。折ふし江間の小四郎立出。すけなりに対面し。いつくへ（9ウ）

御とをり候そ。すけ成きこしめされて。さん候これなるわつはに。えほしかきせたく候らひてたのみ申にまいりて候。やすきほとの御事なり。北条にとい申さんとて。うちにいり時政にかくとかたる　〔サシイロ〕北条きゝあへす涙を。さつとうかへたまひ。それむかしは六十六か年を一むかしとし。中比は。三十三ケ年当代は。廿一ケ年を一むかしとす　〔クトキ〕この人々か世か世にてえほし親をとるへきならは。源氏にてはかまくら殿。平家ならは小松殿の御（10オ）

ゑんにてえほしをきうするか。とき世にしたかふならひとて。はうばいをたのふてきたりたる哀さよ。それ〳〵こなたへしやうぜよとて

〔フシ同〕なけれと。でいのちりをとり。やれねとすたれかけなをし。引つくろへは。すてにはやときうつり返事も。ましまさす　〔ツメ同〕はこわう大きにはらをたて。いかに候十郎殿。ふしきやな江間とのは。なにとてをそく見ゆるそ。やかて心得たり。むかしは伊藤北条とて。鳥のふたつの羽かひ。車の両輪のごと（10ウ）

くにて。おとりまさりはなかりつるに。当君の御代となつて。われ〳〵兄弟か。世になしものにてある間。北条かいやしみて。えほしをきせじその為に。さてはしをそく見ゆるか。其儀にてあるならは。諏訪八幡も御ちけんあれ。こんじやうこの世にて。親のかたきはうたずとも。簾中にみたれいつて。北でうとさしちかへ。死なふするにて候そやそこの程をは十郎殿御用意あれとぞ申ける　〔コトハ〕すけなりきこしめされて。いかなる（11オ）

事そはこわうとの。北条もさは思はれ候まし。心をしつめてまち給へとはこわうをせいし給ふ。そのゝち江間の小四郎たち出。ざつしやうかまへ申とて今まてちさんつかまつる。こなたへ御入候らへとて兄弟をしやうせらるゝ。其ときはこわう色をなをし。兄弟つれてそ入にける。北条やかて出あはせたまひ。ひとつは客人児なれは。箱王を弓手のわき。すけなりをめてのわきへしやうぜらるゝ。その外えまの小四

NII-Electronic Library Service

Nagoya City University

郎をさきとし。一もん（11ウ）
家の子若堂。くるま座にはらりとゐなかれ。さかつき三ごんとをつて後。北でうゑぼしをめしよせ。はこわう殿のかみはやし。びんかきすましきせ申。名をは。助五郎時宗と付させ給ひ　〔カヽルイロ〕その時北条おほせけるは。いかにめん〳〵聞給へ。それえほしといふ事は。わたくしならぬ事にてあり　〔ツメ同〕清和天わうの御代のとき。異国よりも我が朝へ。つくりものをそこされける。公卿殿上人。納言さいしやう以下ほくめん。うくわんむくわんくわんばく（12オ）
てんがさしあつまつてのせんぎなり。みかとえいらんまし〳〵て。是はおのこのたましゐなり。名はゑほしといふもの。へりは大かひつぶはほし。くしげたは半月。とかるは国のたけきさう。かざぐちのひろき事はいのちのなかきさうなり。こゆいをゆふてきる事は。さなから須弥の。はんふくのまなひなり。此えほしをきる人は。いのちもなかく名も高く。寿命ぢやうをんとく自在ふつきの家にいたるへし。此えほしをめされて。すゑはんじやうと（12ウ）
祝ひつゝ太刀とかたなをとり出しはこわう殿に引たまふ　〔サシクトキ〕すけなり御らんして涙を。はら〳〵となかし給ひ。あらはつかしの事ともや。むかしか今にいたるまてえほし子のかたよりこそ。引出ものは申ならひのあるに。かへつてたまはる事のはつかしさよとおもへは。汗もなみたももろともに。とゝめかねたるはかりなり　〔コトハ〕北でう此よし御らんして。あらむさんやすけ成か。おとゝかゑほしをきるほとに。ありしむかしをおもひ出しないつる事（13オ）
のむさんさよ。なくさめはやとおほしめし。さかつきたぶ〳〵と引へ。まことやらんうけ給はれは。ちゝぶに六郎殿。三浦に朝比奈。曽我には十郎殿〈の〉。ひとつ師に付て。まひをならはせ給ふか。中にも十郎殿の御舞のすくれたるよしを承る。これは箱わうとのゝ祝言のはしめなれは。たゝ一かなてとそこはれける。すけなり。まはしものをとおもはれけるか。いや〳〵。かくては座しきの興もなし。まははやとおほしめしなをし。一せいをこそ上にけれ　（13ウ）
〔イロ〕しつやしつ。しつかおたまき。くりかへし。むかしを今に。なすよしもかな　〔フシ同〕むかしを今に。なさはやと。やゝしはらくうたひしか。あら何ともなやこれは無常の。だいぞかし　〔片ツメ同〕舞なをさはやとおほしめし和哥のだいをそあけにける。きみをはしめておかむには。千代も経ぬへし。ひめ小松ひこまつと。三べんふんでまはれは。北でうをはしめ。れんざんなりし人〳〵。一度にあつとかんしけりそのゝち舞もすきけれはいとまを申兄弟（14オ）
。曽我ふるさとにかへりけり（14ウ）

【校異】

本曲の校異に使用した諸本は次のとおり。（内）内閣文庫本、（毛）毛利家片仮名本、（打）打波家本、（松）松村本、（直）直熊本、（京）京都大学蔵一本、（慶）慶応大学蔵伝小八郎本

1オ　○文治元年――（内・毛）去間文治元年、（打）文治元年（「さる

NII-Electronic Library Service

Nagoya City University

あた」ト傍書）、（直）抑　○去間―（直）さても　○いしやう―（慶）しやうぞく、（京）しやうぞく（いしやう）ト傍書）　○河津の三男箱王との―（内・毛・打）箱王殿、（直）箱王わ　○衣装の事をはたしなまてようちてはなれしちゝこの事今のやうにおもはれて忍ひのなみたせきあへずこしの式部を近付いかに候しきぶとの―（直）式部大部に申けるわ

1ウ　○式部殿とそ仰ける―（直）ナシ　○御見物候らへかしはこわう殿とそいふたりける箱王とのはきこしめし―（内・毛）御見物あれかし箱王殿とそ申ける、（打）御見物有かしな箱王殿とそ申されける、（直）御見物候へ箱王殿とそ申ける、（松・慶・京）御見物候へかし箱王殿とぞまうしける　○今やいつやと相待る―（内）今やおそしと待給ふ、（毛）今哉■哉と相待、（直）今やをそしと相待

2オ　○箱王殿きこしめし―（直）箱王このよしきくよりも、（慶・京）箱王殿とぞをしへける箱王殿きこしめし

3オ　○いつの国の―（毛）伊豆の国の、（直）ナシ

3ウ　○みなつゐたりと云けれと猶すけ恒ときかさりけり―（直）と申す人にてをわします　○げでん―（内）けちん

4オ　○すけ恒御供ヲ申ならは―（内・毛・打・直）御供申物ならは　○さあらはかへらん―（直）はや帰らん　○さもゆゝしけなる―（内・毛・打・直）ゆゝしけなる　○横手をちやうとあはせて今まてしろしめされぬか―（内・毛・打・直・慶・京）ナシ　○がんぜんのいとこ―（慶・京）御一族にておはします（（京）ハ「御一族にておはします」ヲ見セ消チニシテ、「がんぜんのいとこ」ト傍書）

4ウ　○立にける―（内）おはします、（毛）をわしませ、（打・慶・京）おはしける、（直）居たりけり　○はこわう此よし見るよりも―（内・毛）去間箱王殿、（慶・京）箱王　○かきのせ―（内・毛・直）たきのせ、（打）だきのせ（「だ」ヲ見セ消チニシテ「か」ト傍書）

5オ　○御一そくのかたはしとめしをかれ申たる―（直）がんぜんの従弟　○公方の隙のなき間―（直）少しのひまのなき間　○これは見参のはしめなれは―（内・毛・打）見参のはしめに何をか箱王殿に参らせん、（慶・京）見参のはじめに何をがな箱王殿にまいらせん、（直）ナシ　○てうほうとて―（内・毛・打）重宝なれは、（直）重宝にて候とて　○とり出してはこわう殿にそ引にける―（慶・京）ひいたりけり

5ウ　○あらうれしや―（直）ナシ　○ほそくして―（直）よわくして

6オ　○うたてすこすそ―（直）うたでやみぬる　○其後―（内・毛・打）去間　○日数―（内・毛・打・直・慶・京）年月

6ウ　○はゝうへはこわうを―（慶・京）母上明日は箱王を　○明日は―（内・毛・直）扨は　○へきときいてあり―（内・毛・直）へきにて有けるや　○なふいかに十郎殿―（毛）いかに候十郎殿、（内・打・直）ナシ

7オ　○申つゝ―（内・毛・打・直）かきくとき　○きこしめされて

NII-Electronic Library Service

Nagoya City University

涙をはら〳〵となかしたまひ―（直）泪を流し　○あらあさましの事ともや―（内・毛・打・直・慶・京）哀実世中に　○それをいかにと申に―（内・毛・打・直）ナシ

7ウ　○男になりてのち―（毛）男になりては、（内・打）ナシ　○はゝ上の―（慶・京）もし母上の　○助成きこしめされてあらうれしきおことか云事かな御身おとこになりてのち―（慶・京）設不孝は候とも

8オ　○あらうれしきおことか云事かな―（内・毛・打・直）ナシ　○申なをすへし―（内・毛・直）申へし、（打）申へし（「なをす」ト傍書）　○めいとにまします―（直）ナシ

8ウ　○今は一日も―（内・毛・打・直）祐成おほせけるやうはいまははや一時も、（慶・京）一日も　○たれやの人を―（内・毛・打・直・慶・京）如何成人を　○しよせんおもひ出したり当君の御しうと北条殿をたのむへし―（内）ナシ、（毛・直・慶・京）伊豆の国北条殿を頼むべし、（打）伊豆の国北条殿をたのむへし（「所詮おもひ出したり」ト傍書）、（松）げに〳〵おもひ出したり当君の御舅北条殿をたのむべし　○ひけいする―（内・毛・打・慶・京）用意する、（直）よをいして

8ウ～9ウ　○馬は一疋なり…末代もためしすくなき次第なり―（直）ナシ

9オ　○引まはし―（内）引よせ　○ろんしける―（慶・京）辟退する　○ぎやくなる事のあるへきか―（内・毛・打）逆なることの候へきかのれや箱王

9ウ　○兄弟の人々は―（内・毛・直）兄弟、（打）兄弟のひと〳〵（「のひと〳〵」ヲ見セ消チニスル）、（慶・京）ナシ　○すけなりに対面し―（内・毛・直・打）ナシ（但シ（打）ハ「助成にたいめんし」ト傍書）

10オ　○すけ成きこしめされて―（毛・直・慶・京）ナシ　○さん候―（内・毛・直）さん候別のしさいにてさふらはす、（打）さん候別の子細にて候はす（「別の子細にて候はす」ヲ見セ消チ）、（慶・京）それがし是まで参る事べつのしさいにて候はす　○たのみ申にまいりて候―（慶・京）是迄参りて候　○やすきほとの御事なり―（内・毛・松・打）小四郎聞てやすき程の御事也但父の（（打）ハ「也但父の」ヲ見セ消チ）、（直）小四郎聞てやすきほどの御事なりさりなから父の、（慶・京）やすき程の御事なりたゝし　○涙をさつとうかへたまひ…廿一ケ年を一むかしとす―（直）ナシ

10ウ　○哀さよ―（打）ふひん（「あわれ」ト傍書）、（慶・京）むざんさよ　○ましまさす―（内・毛・打・直・慶・京）なかりけり

11オ　○いやしみて―（内・毛・打・直）いやしめて　○諏訪八幡も御ちけんあれ―（直）ナシ　○すけなりきこしめされて―（慶）すけなりき　○いかなる事そはこわうとの―（直・慶・京）ナシ

11ウ　○江間の小四郎たち出―（内・打）ゑま殿出合、（毛）ゑま殿立出、（慶・京）江馬の小四郎いであひ　○兄弟つれてそ入にける―（慶・京）きやうだいつれて座敷にいる　○めてのわきへしやう

NII-Electronic Library Service

Nagoya City University

ぜらるゝその外―（直）妻手の座敷になをし玉ふ　〇一もん―（内・毛・打・慶・京）いちそく、（直）その外一族

12オ　〇さかつき三ごんとをつて後―（内・毛）三献過て後、（打）三こんの盃過て後、（直）三献盃すきければ、（慶・京）三ごんさかづきすぎてのち　〇ゑぼしをめしよせ―（慶・京）ざしきをたちたまひゑぼし一頭とりいだし　〇助五郎時宗―（慶・京）北条の助五郎時宗　〇いかにめん〳〵聞給へ―（直）ナシ　〇公卿殿上人納言さいしやう以下ほくめんうくわんむくわんくわんばくてんがさしあつまつてのせんぎなり―（直）公卿せんぎまち〳〵なり

13オ　〇涙をはら〳〵となかし給ひ―（打）なみたをさつとうかへたまひ、（直）ナシ、（慶・京）嬉しやとはのたまはでなみだをはら〳〵とながし　〇あらはつかしの事ともや―（内・毛・打・直）あゝら恥敷や　〇えほし子のかたよりこそ―（慶・京）ゑぼしごのかたよりゑほしをやのかたへこそ　〇おとゝかゑほしをきるほとに―（直）ナシ

13ウ　〇なくさめはやとおほしめし―（慶・京）すけ成が心を詭めばやとおほしめし　〇さかつきたぶ〳〵と引へ―（直）ナシ　〇まことやらん―（内・毛・慶・京）いかに候十郎殿誠や、（打）いかに〈や〉十郎殿まことやらん、（直）いかにや十郎殿真や　〇祝言のはしめなれは―（慶・京）げんぶくの祝言なれば　〇すけなり―（内・毛・直）祐成きこしめされて　〇いや〳〵―（内・毛・打・直・慶・京）ナシ

（入鹿）

そも〳〵鎌足の先祖をくわしくたつぬるに。天津こやねのみことに。三十六代の御すゑ。みけこのきやうと申て天下にかくれぬ臣下也。しかるにかのみけこの卿は。君の御覚めてたくし。天下のまつりことを我かまゝにし給へは。よそねみ人へんじゆして。いかにもして御中のあざらけなんをたくみ。ざんじんけうかひをいたせとも。みかと御もちいましまさす。しかりとは申せとも。諸卿いちみのおんるにてなためかたくやおほし（1オ）

けん　〔クトキ〕科もなかりしみけこの卿に勅勘のせんじをかうむりて。はるかなりける東路や　〔フシ同〕常陸の。国にはいしよある。思ひをは岩山の。夕の雲にかけなから。涙を遠嶋の。道より末に先たてゝ。見もならはさる東路や。常陸の国に下り。宮のあたりに庵して。明しくらさせ給ひけれは。あたりの里人見まいらせ。鹿嶋の宮に。住はとてしらう。祢宜とそ。申ける。いつしかはやく。おちぶれ。野夫田舎にましはり。さんのふのときを得。いつかいの。鋤を（1ウ）荷なひ。すんの田をかへし。一しのくわの。葉をとりてけんはくの。たくゐをいとなみ。いみじからねと光陰の。去年はことしに。おしうつりあやめも知らす。すみ給ふ　〔コトハ〕かくて若きみ出来給ふ。父母の御悦中々申計もなし。すでにその年打すき　〔カヽルフシ〕夏くれ行は水無月の　〔同〕中の五日の。あつき日に田の草とりに。出給ふ。いたはしや。若きみを。此田の疇にぐし出て。青葉のしばをお

NII-Electronic Library Service

Nagoya City University

りかさし。なかでゐねよとちをふくめ。夫婦ともにもゝ（2オ）
草を。とる手に付て苗のはの。さかへん事を。よろこひてひめも。そ
とりそ。くらさるゝ。懸りける処に。いつくからとも知らさるに。ひ
とつの狐きたり。鎌を口にくわへようしの。まくら神にをき。かきけ
すやうに。うせけれは。ちゝはゝいそき立よりて。かまをとりて。見
給ふに。氷手の内に。かゝやくやうな鎌てあり。もしもたからに。な
るやとて此子に添て。そたてらる。ぶゆくれんまの時の得。はや十六
になり給ふ橘の。卿の御とき。野夫田舎のわさ（2ウ）
なれは。庭の夫にさゝれ。なく〳〵京へ。上りつゝ。百敷や。大内の
庭の小草を清めしに。行事の弁は御覧して。おほくの仕丁夫の中に。
いとけなきわつはあり。かたちはやつれはてたれとも。たゝ人ならす
覚たり。こんこつのさうのあり。こんこつの。さうとは大臣のさうの
事なり。いなかへ今はくだすまじ。宮中にとゝまりて。みかとを守護
し申せとて。もんせうじやうにんぜられ。右京の大夫に経あかりて。
宮中のましはり。はやうんかくに。なりたまふ（3オ）
果報の程の。ゆゝしさよ　〔コトハ〕懸りし時の折節に。曽我の入鹿
の大臣とて。大悪げきの臣下あり。君の位を奪とり。我王にならんと
たくみけり。此事天下の大事とて。東山のおく。藤の多くはいかゝり
たる大木の本にて。宣儀ひそかに時を得。曽我の入鹿の大臣をは。右
京の大夫に仰付うたるへしとの輪言なり。さる間鎌足勅命なれはそむ
き得す。れうぢやう申かへり。幼子のとき狐のあたへたびたるひとつ
の鎌をたばさ（3ウ）

み。ねらひ窺ひ給へとも。かの入鹿の大臣は。大通力の者にて。三年
の事を兼てしり。剱をたはさみ矛をもち。宮中の出仕にも。警固の者
前後に。みちさきをはらはせ出入はうたるへきやうなかりけり。かま
たりこゝろにおほしめす。人をたばかる計略。したしくならては叶は
しとおほし召れける間。みめよき女を尋出し。我か姫宮と号しいつき
かしつき給ひけり。美人はいはねとかくれなし。みやこの上下かつし
つて。をよぶもをよばさりけるも（4オ）
みなのそみをかけぬ人はなし。ある時鎌倉。いるかのしんの御かたへ
御ふみをつかはさる。うき世にきたるしるしにや。ぐしを一人まふけ
たるか。せめてぶうんのいたりにや。かひなき姫にて候らへとも。い
もとやらんの其ためか。のそみはおほく候らへ共うけ引かたも候らは
す　〔クトキ〕当君の御世にはおかたさまならては。したしみ申さん
たよりもなし。従女とおほし召るゝとも。めしをかれ候はゝ　〔フシ
同〕身の面目。たるへしと書こそをくり。給ひける　〔コトハ〕いる
かはおもき人なれ（4ウ）
ともいもにははやくくつろき。多年のそみの折ふし。御ゆるされは喜
悦とて。やかてかの姫むかへ取いつきかしつきたてまつる。かくて若
君出来たまへは。かもんの繁昌ときを得。是にしかしとさゝめかるゝ。
かまたりなのめにおほしめし。今ははやちかつきぬ。たばかりよせて
やす〳〵と。うたはやなんとおほしめし。風の心地にもてなし。日を
えてはんじ。一せひのふりをまなび給へは。宮中の上下とふらはさる
はなかりけり。されとも入鹿は見（5オ）

NII-Electronic Library Service

Nagoya City University

え給はす。まちかねたまふぜひにて御文をつかはさる　〔クトキ〕すてにうき世のしやうがひよめい今をかきり。なり。おや子わりなきたいめんも。今度はかりの事なるへし　〔フシ同〕いるかの臣も。きたの方も御出あれとかかれたり　〔コトハ〕入鹿此ふみ御らんして。大きに肝をつふさせ給ひ。くるまやりだせ牛飼よ。いそかせ給へ御前と。とる物をもとりあへす。二人両車にめされ。はややり出し給ひしか。ちうにてこゝろをひつかへす。しはしよ牛飼よ。此車（5ウ）をとゝめよ。御ぜん計やり申せ。我はゆかしと思ふなり。それをいかにと申に。むかし異国にたとへあり。れうきんこくのれうわうと。げんじやうこくのげんわうと。国のさかひをあらそひ。数度の戦隙もなし。玄国はたせい。れうこくはぶせいなり。しかりとは申せとも。れうこくのみかと。にきんぞんきんらくとて二人のつわものあり。天をかける時。うき雲を踏事。平路をつたふことし。大地をとをるとき。磐石をうかく事薄氷をとをすことし。波の（6オ）上にて馬をのり。みやうくわの中に身をかくし。神通自在にかけまはれは。かれら二人にかけたてられ。げんこくのつわものは数を尽してうたれけり。すでにはやげんわうも。うたるへきにておはせしが。げんわうかしこきこゝろにて。みめよき女をたつね出し。ばたふによと名を付。きんぞんをむこにとる。きんぞんたけきものなれとも。いもにははやくくつろぎ。かのひめ宮にちきりをこめ。げんこくにわたる。おと〳〵のきんらくも。兄かかくなる上は（6ウ）。ちからをよはぬ次第とて兄弟つれてそわたりける。げんわうなゝめにおほしめし。二人のものをめされ。かのひめみやと申すはまるかまさしき姫なり。ちきりをこむるなんだち。なとか子にてはなかるへき。親子わりなき中ならは。れうわうをうつてたべ。もしさもあらはかの国を。かた〳〵へ渡さんと。むつましけにの給へは。兄弟のものとも。のかれかたくやおもひけん。れうぢやう申かへり。れうわうにつかひたてまつり。びんぎあらはとねらひけり（7オ）。れうわう御らんして。例ならす汝等か。まるにちか付ことよきは。げんわうにたのまれ。まるをうたんとするものなり。うたれしとたにおもひなは。いかにおもふともうたるまし。さりなからなんぢら。としころまるにつかへ。数度の凶夷をほろほし。いままて国を治るもたゝなんぢらがきうかうたり。日比の忠のふかけれは。いのちを汝にあたふへし。しかりとは申せとも。五躰不具にあるものは。仏躰を受かたし。まるか崩御の亡躰を。ちつとも（7ウ）そゝかさす。きんざんにべうをつき。こめたてまつるへきなり。すはたましゐとの給ひて。みつから胸の間より。青きくちなふとり出し。みわげにとつておしわげ。きんぞんにあたへたび給ふ　〔カヽルフシ〕御最後の輪言に　〔同〕まるかいのちは。おしからす。なんぢら他国のたばかりを。知らさりけるこそむさんなれ。必後侮すへきそと。是を最後の。輪言にてたちまち崩御。なり給ふ　〔ツメ〕御遺言にまかせて。きんざんにべうをつき。御からだをほりうつみ。魂（8オ）のくちなふを。げん国へわたして。げんわうにこれを見せ申。げんわうなゝめにおほしめし。爰迄のわさなれは。きんぞんをもきんらくを

NII-Electronic Library Service

Nagoya City University

も。もろともにうちとつて。世をおさめんとの宣儀にてあふ官軍うんかにとりまひたり。むさんのありさまや。れうわうのおはせしときにこそ。きんぞんきんらくかゆみやのゆふもつよくして。ゐなからしよこうをせいしか。れうわう崩御のそのゝちは。通力もつかれ。計略もめくらす。つるぎもとはずい（8ウ）

はんや。ほこをなくる事もなし。いたつらにかれら。うたるへきにてありしか。猶兵法のとくによりおほくの中を打やふりれうこくさしておちて行。あとよりもくわんぐんおつかくる。せんほうつきてれうわうのみべうのまへにまいり。いかゝはせんとかなしめは。へうのうちにこゑあつてまるか末後の輪言。今こそおもひしるへけれ。かたきはちかつきぬ。いたつらにかれら。うたれん事のむさんさよいて〳〵さらはなんちらを。ひとみつぎみつぎ。今度の命（9オ）

たすけん。まるかからだをほりおこし四色の獅子におしのせ。ひとつのほこをあたへよ。ふせいでみんとおほせあつてべうは大きにしんどうしつかはふたつにわれにけり。ふしきの思ひをなしつゝ。ほねをひろひつぐほとにいかゝはしてなかりけん。おとがひの骨のたらされは。左のひざの。かわらを取て。おとがひの骨にさしつぐ。さてしゝむらは朽失ぬとりつくろふにあたはす。青黄赤白の四色の獅子におしのせ。鉾をまいらせたりけれは（9ウ）

ひやうしにあはせかけ引。おもてをあはするものはなし。げんこくのつわものは数を尽してうたれけり。しかりとは申せとも。その日もすでにくれ。入あひときになりけれは亡骨とつかふかばねにて。日もいらばはなれ。かなふへしとも覚す。高き岡にあかり。入日をしはしとゝまれとまねき給ひたりけれはけに日光もあはれみて。山のはにかゝる日か又巳の刻に立かへる。かたき是を見。いよいよ身意をとゝめ。合戦をとめてにげかへる。こう（10オ）

たいのめいせき。舞楽につくりをき給ふいり日を返すまひの手。此御代よりもはしまれり。れうわうのひきよく。此御事なりけり。ばとふの舞と申は。ようしのひめの事なり。きんぞんきんらくは。らくそんなつそりこれなり。げんしやうらくはやたいな。げんしやうらくに作らるゝ此等の事を聞時は我も女にちきり。鎌足にたばかられ明日後侮のあらん時せんひをくうとかなふまし。今日はゆかてもありなん。あすは日がらよからす。うちとけ（10ウ）

給ふ事もなし今度もたばかりそんじてうたでそやまれけるとかや

〔コトハ〕かまたりちからに及はせ給はす。春日の宮に参籠あつて。一せつ多しやうの理にてころすは科にて候まし彼入鹿の大じんは。大悪逆のものにて天下をかろくするのみならす。国をつやせるげきとたり。しかるにかの入鹿を。やす〳〵とうたせてたはせたまふならは。奈良のみやこのその内に。興福寺のこんだうとて。ぢやうろくの釈迦の豫を作り。げうわう（11オ）

をいのり。国家をごゝくすへきよし。大願をかけまいらせ。すこしまとろみたまへは。夢にもあらす。又うつゝともあらす。あおひの榊葉一房なをしの袖にかゝり。又あたりを御らんありけれは。榊のほそ杖ひとつあり。そも此つゑと申はなにといへるしさいそや〔クトキ〕

NII-Electronic Library Service

Nagoya City University

をよそ杖にはたしゆあり。仏のつえは摩訶菩薩杖。無明長夜のたみのうきまよひをしるつゑなり。菩薩の杖は楊杖。くとくの高きを表せり。ごんぐげだつの竹杖（11ウ）

。はくたわうのしゆはんじやう。しゆもんのもてるしゆじやうこそ。ふかきこゝろのあるなるに　〔フシ同〕今の榊の。ほそ杖は。まうろふの。迷闇杖めくらの。つく杖なり。てる日月は。あきらかにましませと。こくう。長夜のことくなれは。杖にひかれてたとり行。かるかゆへに。名付てめいあんぢやうと。申なり　〔コトハ〕我も目くらにあらすとも。此つゑをつきつゝ。まうもくのまなびをし。かたきにこゝろをゆるされて。うてとおほしめさるゝかと。やかて下向の道より（12オ）

も。此間の病気に目をやみつぶしたるとて。たどりあるきたまへは。宮中の上下。ゆゝしかりける臣下をとてとぶらはさるはなかりけり。されとも人鹿は御らんして。人をたばかる計略。なにとかたくみ給ふらんおそろしさよと用心す。ころは冬の事なるに。囲爐裏に火を置せ。いるかのしんとかまたり御手をあたゝめ給ひけるに。鎌足の若君の二さいにならせ給ふを。めのとがいだきまいらせて。あたりをまかりとをるとき（12ウ）

むつからせたまへは。かまたりきこしめされて。なにとて其子をなかするそ。それこなたへとありしかは。さうなふまいらするとて。さかりのすみの火の中へとりおとしたてまつる。入鹿このよし御らんして。まことといつはりこゝなるへし。なと見おとさであるへきそと。さしのいて見たまへは。かまたりいとゝさとつて　〔カヽルフシ〕あらさるかたに手をあげ　〔同〕もたへこかれたまふまにつゐに。むなしくなり給ふ。かひなきしがひをとりあげ。おひざのうへにをき（13オ）

たまひ。爰はいつくまへうしろ。かしこはいつくおもてかほ。足手をさくりまはしつゝ。こはいかにあさましや。あたりに人はおはせぬか。なととりあげてたび給はぬ。じみとくど。ぜんとたはほさつのきやうにあらすや。あはれかたわのその中に。めくらはことにあさましやかくかたわなるうき身こそ。さきたちほだひをもとはれんとこそおもひしに。眼前みやうくわの中にいるを。たすけぬ事のむさんさよ。いきてかひなきうき身をも。ころし（13ウ）

てたへや人々とて。天にあふぎ地にふして。りうていこかれたまひけれは。見る人もきく物もみな。涙をそ。なかしける　〔コトハ〕入鹿このよし御らんして。あらいたはしやまことにもうもくし給ひけるそや。されはわか身にいつはりあるものか。人のまことをうたかへり今よりのちはうたかひのしんをとゝめ。したしむへしとおほしめしはや打とけさせ給ひけり。かまたりなゝめにおほしめし。びんぎよざまなり。御用意あるへしと内裏へ奏聞（14オ）

申されたり。みかとなゝめにおほしめし。かねてより御たくみの事なれは。異国よりもさんがのやうをわたされたり。ひらかるへき道理あり。参内あるへしとて勅使たちけれは。しきやうのこらす参内ある。かまたりはかり不参なり。たとひまうもくなりとも。大事のせんぎなる間。参内なくてはかなふましいとかさねて勅使立けれは。鎌足のし

NII-Electronic Library Service

Nagoya City University

んも参内ある。いつよりも法衣引つくろひ。ようしの時（14ウ）
きつねのあたへたひたるひとつのかまをたばさみ。こばちやうの車のあさやかなるにめされ。ようめいもんにくるまをとゝめ。雑色二人に手をひかれ。御前まぢかくなりけれは。おゝそなれはそれよりはかいしやく申ものもなし。ししんでんのきだはしをさぐる〳〵よぢのほり。大床のすのこにかしこまり。御まへをうしろになし申あらさるかたをふしおかむ。みかとえいらんまし〳〵て。あれはいかにかまたり。本座にあれ（15オ）
との宣旨なり。諸卿たちものこらす。御本座あれと申さるゝ。こゑにつゐてかまたり。さぐりよぢのほる。すでに入鹿の座ちかくなれは。いるかかたひざをおしたて。鎌足の御手をとつて引あけんとのしきだひなり。すでにはや御座しき。身の毛をたてゝおぢおそれ。はやさはかしくなりけれは。かたきに色をさとられては　〔カヽルツメ〕あしかりなんとおほしめし　〔同〕三年か間ふさいたる両眼をくわつと見ひらき。弓手の（15ウ）
なをしの下よりも件のかまをとり出し。うちふりたまふと見えしかは入鹿の臣の御くびは水もたまらす落にけり。くびもなきむくろが。ゐたる所をづんと立。かまたりをおしのけめてのなをしの下よりもこほりのやうな剱をぬき。御座へはしりあかり。御しとねにいたきつきつつついつしごくして北枕にそふしにける。されともきみはかねてより。あらうみのしやうじのまに立かくれさせ給へは。さらにつゝがもましまさず（16オ）
入鹿討れて其後。国土もとみさかへ。たみのかまどのゆたかなり（16ウ）

【校異】

本曲の校異に使用した諸本は次のとおり。（内）内閣文庫本、（毛）毛利家本、（打）打波家本、（東）東大本、（松）松村本、（直）直熊本、（京）京都大学蔵一本、（慶）慶応大学蔵伝小八郎本

1オ　○そも〳〵鎌足の先祖を―（東・松）去間かまたりのゆらいを　○みことに―（内・打・直・慶・京）みことより　○よそねみ人―（東・松）みな人　いたせとも―（慶・京）そふもんすると申せ共　しかりとは申せとも―（慶・京）ナシ　○諸卿―（東・松・慶・京）げにはしよきやう
2オ　○かくて若きみ出来給ふ父母の御悦中々申計もなしすでにその年打すき―（慶・京）かくてわか君いでき給へばもりやめのとのなきまゝにあくれば父のひさの上暮れば母のさんごにいだきそだてはごくめり比は五月も打過　○父母の御悦中々申計もなし―（東・松）ナシ　○すでにその年打すき―（毛）ナシ
3ウ　○懸りし時の折節に―（東・松）かゝりける所に　○天下の大事―（松・東）天下のせうし　○東山のおく藤の多くはいかゝりたる大木の本にて―（東・松）ナシ　○さる間―（打・東・松・慶・京）ナシ　○れうぢやう申かへり―（慶・京）やがてりやうじやう

NII-Electronic Library Service

Nagoya City University

仕り

4オ　○警固の者―（東・松）けいごのぶし

4ウ　○せめてぶうんのいたりにやかひなき姫にて候らへとも―（慶・京）ナシ　○かひなき姫にて候らへともいもとやらんの其ためか―（東・松）いもとやらんの其ためかかひなきひめにて候へは　○いるかはおもき人なれともいもにははやくくつろき―（直）入鹿此文御覧して

5オ　○いもにははやくくつろき―（東・松）ナシ　○なのめにおほしめし―（慶・京）きこしめされて　○ちかつきぬ―（慶・京）打とけぬ　○風の心地にもてなし―（慶・京）ナシ　○宮中の上下―（東・松）きうちうの上下ゆゝしかりつるしんかをとて　○見え給はすまちかねたまふぜいにて―（慶・京）まだみへずまちかね給ふこゝちして

5ウ　○御文を―（東・松・慶・京）いるかのしんの御かたへ御文を　○よめい―（直）ナシ　○肝をつふさせ給ひ―（慶・京）をどろき給ひ　○とる物をもとりあへす―（慶・京）ナシ　○二人―（他本）二人なから　○めされ―（慶・京）とりのらせ給ひ

6オ　○異国にたとへあり―（東・松）いこくにたとへありみな人〳〵もきゝ給へかたつてきかせ申べし、（慶・京）いこくにためしあり　○れうこくのみかと―（東・松・慶・京）れうこくのみかた　○二人のつわものあり―（他本）二人のたけき兵あり（（内）ハ「の」ナシ）　○踏事―（東・松・慶・京）はしる事

6ウ　○神通自在に―（慶・京）大通自在の　○ばたふによと名を付―（東・松）わがひめみやとかうし　○たけきものなれとも―（慶・京）かしこき者なれど　○おと〳〵のきんらくも兄かかくなる上はちからをよはぬ次第とて兄弟つれてそわたりける―（慶・京）ナシ　○二人のものをめされかのひめみやと申すはまるかまさしき姫なりちきりをこむるなんだちなとか子にてはなかるへき―（慶・京）兄弟を近付　○かのひめみやと申すは―（打）〔いかに汝ら〕彼姫宮と申は

7オ　○かた〳〵へ―（東・松）めん〳〵に　○れうわうにつかひたてまつり―（東・松）れうこくへしのびいり、（慶・京）れう国にしのひかへつてみかとにつかへたてまつり

7ウ　○ちか付―（打・直）したしみ　○げんわうにたのまれ―（東・松）いかさまけんわうにたのまれ、（慶・京）うちにあくしんある故な如何様にも汝らは玄王にたのまれ　○さりなからなんぢら―（内・毛・直・東・松）しかりとは申せとも　○治るもたゝ―（東・松）とる事も、（慶・京）しる事は只

8オ　○みわげにとつておしわげ―（直）ナシ

9オ　○おちて行―（打・直・東・松・慶・京）にけて行

9ウ　○ひとつのほこをあたへよ―（慶・京）ナシ（（京）ハ「ひとつのほこをあたへよ」ト傍書）　○おほせあつて―（内）宣旨なり、（毛・打・直・東・松・慶・京）宣旨あり　○いかゝはしてなかりけんおとがひの骨のたらされは左のひざのかわらを取ておとがひの

NII-Electronic Library Service

Nagoya City University

骨にさしつぐ―（直）ナシ

11オ　○一せつ多しやうの理―（他本）一切多生の道理　○候まし―（他本）候へとも　○大悪逆のものにて―（他本）ナシ

11ウ　○すへきよし―（他本）すべしと　○まとろみたまへは―（内）まどろみ給ひける、（毛・打・直・東・松・慶・京）まとろみ玉いけるに　○しさいそや―（他本）心ぞや　○たみのうきまよひを―（東・松）くらきやみまよひを

12オ　○此つゑをつきつゝ―（東・松）ナシ　○まうもくのまなびをし―（慶・京）ナシ　○下向の道よりも―（慶・京）下向の道よりも此つえをつき

12ウ　○ゆゝしかりける臣下をとて―（慶・京）ナシ　○冬の事なるに―（慶・京）さむけき冬なるに

13オ　○かまたりきこしめされて―（慶・京）ナシ　○さかりのすみの火の中へ―（慶・京）乳母がいまだおさなくてさかりのすみの火の中へ

13ウ　○爰はいつくまへうしろかしこはいつくおもてかほ足手をさくりまはしつゝ―（慶・京）ナシ　○こはいかにあさましや―（慶・京）こはいかにうらめしや　○めくらはことにあさましや―（東・松）めくらはことにうらめしや、（慶・京）めくらはことにうらめしやしかもいつしのわかなれば　○ころしてたへや―（慶・京）がひしてたべや（（京）ハ「ころ」ト傍書）

14オ　○みな涙をそなかしける―（東・松）あわれととはぬ人っぞなき、（慶・京）袖をしぼらぬ人ぞなき　○されはわか身に―（慶・京）いかにはういっじやけんにて人を設給ふ共かんせんわかこを火に入てたすけぬ事のあるべきかされはわか身に　○したしむへしと―（慶・京）ちかつかばやと　○なゝめにおほしめし―（慶・京）今はかふと思召し

14ウ　○なゝめにおほしめし―（内・毛・打・東・松・慶・京）叡聞まし〳〵て、（直）ゑいらんまし〳〵て　○かねてより御たくみの事なれは―（東・松）ナシ　○参内あるへしとて勅使たちけれは―（慶・京）諸卿のこらず参内あれとちよくしをたてさせ給へば　○ようしの時きつねのあたへたひたるひとつのかまをたばさみ―（東・松）ナシ

15オ　○雑色二人―（打・東・松）わつは二人、（慶・京）ざつしき　○御前まぢかくなりけれは―（打）ナシ　○ししんでんの―（慶・京）しやくもつてかまたりしゝんでんの　○かしこまり―（慶・京）笏取なをしかしこまり

15ウ　○さぐりよぢのほる―（他本）さくり〳〵よぢ上る　○かたひざをおしたて―（直）ナシ　○とのしきだひなり―（内・東・松・慶・京）とそし給ひける鎌足は（（慶・京）ハ「を」）いるかををしあけんとのしきたいなり、（毛）とのしきたいなり鎌足わ入鹿ををしあげんとのしきたいなり、（打）とのしきたいなりかまたりは入鹿をとつておしあけむとのしきたいなり、（直）とのしきたいなりかまたりわ入鹿ををしあけんとそしたまいける

NII-Electronic Library Service

Nagoya City University

16オ　○かまたりをおしのけ―（打）ナシ

（日本記）

そも〳〵日本開闢の砌。伊奘諾伊奘冉二人の尊かたらひをなし。ともに分ちてのたまはく。すでに天ひらくるうへさためて下に国有へし。八十嶋をもとめんとて。雲の上よりも御鉾をさしをろし。一大海のおもてをかきさくり給へとも。ほこにあたる嶋もなし。されはにや其空劫の以前には。天地ひらけ始す。今上古のときを得。御子出現の身をわけ。頭を須弥となし。髪鬚を木草とし。眼を日月とし。出入いきを風（1オ）

とし四つのえたを四州とす。骨は金泪は水。■肉を土となし。青色を東。赤をみなみ白きを西。黒きを北と名付て。黄なる色を中央とするなり。中を土につかさとつて甘き味出来。東に青き木を生して。酸味をなすとかや。南に赤き火を生して。苦きあぢをなせり。西には白き金ありて。からき味をなすとかや。北にはくろき水ありて。鹹味をなせり　〔カヽルフシ〕すき味をは薬師とし双調のこゑを説法（1ウ）す　〔同〕にがきをもつてわうしきの。宝勝如来是なり。辛味を阿弥陀とし平調の。こゑをいたすなり。鹹をはんしきでう。釈迦の音声是なり。甘味をは大日のいちこつでうのひゞきあり。宮商角徴羽。五音は酢苦甘辛鹹き。乳味洛味。性触味熟蘇味醍醐味。五のこゑを集つゝ。華厳阿含。方等般若法花と是を申なり。仏も教も実言も。此中よりも作出す。地獄極楽をしなへて。仏も（2オ）

法も僧法も。一体かならす三宝。三ほうやかて三観。三くわん直に一心。一しんやかて空にして。へたてもさらになきものを。いかなる迷ひふしきにか。是ほとひろき。大海にひとつのしまのなかるらん

〔コトハ〕伊奘諾の尊鉾をあけさせ給ふ。伊奘冉御らんあつて。なにとてみほこをあげ給ふぞ。天の陽をかたとり。地の陰せいのあかりてこそ陰陽とも開へけれ。此利に迷ひいたつらに御鉾をあげ給ふか（2ウ）

。たゝねんころに尋給へと仰けれは。重て鉾をおろさんとし給ふかのほこのしたゝりか。はるかの海にとゝまつてひとつの嶋となりぬ。伊奘冉御らんあつてあわ。ちよと仰られし。その御ことはをかたどり今の。淡路しま是なり。さてその御鉾のしたゝりは。なにといへる子細によつてかたまりけると尋ぬるに。かの大海のおもてに。大日の梵字のうかんてなみにゆられてたゝえゝる。印字の其上に。ほこの露のとゝまり（3オ）

て　〔カヽルフシ〕かたまり土となりにけり　〔同〕大日の梵字のそのうへに。出来はしめし。国なれは大。日本国とは申なり。日本国の淡路しま。けしのせいにいできて。天ちくもひらけりさて。太唐も始はれり。さしもにひろき天ぢく国。月をかたとる国なれは。月氏国とは申なり。唐土もひろしと。申せとも震丹国と名付つゝ。星をかたとる国にてあり。日本我朝は。小国なりとは申せとも。日試と名付つゝ日をかたとれる国にて（3ウ）

。三国一の。我朝にこゝろのまゝの。寿命にてなかく。栄るめてたさ

NII-Electronic Library Service

Nagoya City University

よ（4オ）

【校異】

本曲の校異に使用した諸本は次のとおり。（内）内閣文庫本、（毛）毛利家本、（松）松村本、（慶）慶応大学蔵伝小八郎本

1オ　○されはにや―（他本）されはにやすなはち　○始す―（内）はしめ、（毛）初め（「す」ト傍書）　髪鬚を木草とし―（内・毛・慶）ナシ

1ウ　○四州とす―（毛）四しうとす（「かみひげを草木とす」ト傍書）、（松）四州といふ　○青色を東―（慶）かみひげを木草としあをきいろをひかし　○東に青き木を生して…北にはくろき水ありて醎味をなせり―（内・毛・松）北には黒き水有てしははゆき味をなすとかや西には白きかね有て辛き味をなせりみなみに赤き火をしやうしてにかきあちをなすとかや東に青き木をしやうして酢きあちをなせり、（慶）南にあかき火をしやうじてにがきあちをなせり西にはしろきかねありてからきあぢをなせり北にはくろき水ありてしはゝゆきあぢをなせりひかしにあをき木をしやうじてすきあぢをなせり

2オ　○実言も―（他本）真言も

2ウ　○伊奘諾の命―（毛）伊弉諾の尊（「去間」ト傍書）、（慶）さるあひだいざなぎ　○伊奘諾の命鉾をあけさせ給ふ伊奘冉御らんあつて―（松）いさなみ御らんあつて（「み御らん」ヲ消シ、「ぎのみことほこをあげさせたまふいざなみ御らん」ト傍書）

3オ　○おろさん―（他本）さしおろさん　○伊奘冉―（毛）伊弉冊（「諾」ト傍書）、（慶）いざなぎ　○さてその―（他本）さてそも

（笛の巻）

さる間洞幸の阿闍梨。ときわの御まへにまいり。見くるしけなる草庵を結ひて持て候。庭の花の御興にも御出とこそおほせけれ。常繁きこし召れて。呼すともたつね行。坊中のあり様をも見はやとおほしめさるれは。時刻うつさす御出ある。忠節けうをつくし。爰をせんとゝそきらめきける。酒も半なりしとき。ときわ仰けるやうは。いかにや洞幸。うし若と申てよこなしわらんべ一人あり。別当に参らする（5オ）。よくは弟子ともおほしめせ。あしくは下の草切とも。思召れさふらへや。みなし子にてさふらへは。よきやうに取立て御らんせよとそ仰ける。洞幸聞し召れて。頓而れうぢやうを申させ給ひ。別当自身御迎に参らるゝ。かくて丑若との鞍馬へあがり給ひ。学文せさせ給ふに。師か一字ををしゆれは二字とさとり。二字を教ゆるれは百字にくらからす。筆をとつてのひつほうには。ぎよりんこそうすいろのてん。くじろうしつの筆の跡文書の（5ウ）

数を残さす習ひそ尽し給ひける。四門他山の其内にも。かゝるめいよの児かくしやうの。有つへしともおほえすとほめぬ人こそなかりけり。六はらにおはします。ときわつたへきこしめし。御悦はかきりもなし。

NII-Electronic Library Service

Nagoya City University

それ児のもてあそひに。なに〳〵と申とも。管絃に過たる事そなき。其中にとりわき。笛は一の物なれは。よからんふゑを買とつて。うし若にとらせはやとおほしめし。都まちかき淀の津の。弥陀次郎か本よりも。ふゑを一くわん買とつて（6オ）

。くらまへ上せ給ひける。うし若なゝめに思しめし　〔カヽルフシ〕二月半の比よりも　〔同〕ふきはしめさせ給ひつゝ。其としの暮には百。廿てうの。楽をはふきこそ。おほへ給ひける　〔コトハ〕ある時うし若殿。此笛のゆらいを尋はやとおほしめし。弥陀次郎を召れけるに。みた次郎めしと承。いそきくらまへのほり。丑若とのの御坊に参り庭上に畏る。うし若殿は御覧して。汝か淀のみた次郎とは。さん候と申。この笛は漢竹か梵竹か。きかまほしやと仰けれは。みた次郎（6ウ）

承。さん候此ふゑと申は。一とせ讃岐の国屏風の浦にて。ほうき五年に生れ給ふ。弘法大師入唐し。青龍寺におはします。けいくわくわつしやうを師とたのみ。真言の秘密ときはめさせ給ひ。われ入唐の次而に。天竺霊鷲山におはします。大聖文珠を拝まんとて。しん〳〵とある遠嶋を分こえ給ひけるほとに。てんしうの沖を通り。かうしうといへる国には十の道わかてり。その中にとりても。かうなんといへるはせきけんのみなみなり（7オ）

。かの道にさしかかり。大たくの野辺を行過。かうたくの堤をつたひつゝ　〔カヽルフシ〕般若台をそおかまれける　〔同〕かのはんにやだいと申は。なんがく大師。久しくおこなひ給ふ御寺なり。今日本に生れてはまやとの王子聖徳太子とも申なり。衆生斎度のしひふかき。なんがく大師と伏おかみ。又五千里を行過て。玉泉寺とて御寺あり。かの寺と申はなんがく一のでし。ちき上人の御寺なり。彼天台に通ひて。御法をとかせ給ひけり。あなたへも五千里（7ウ）

。こなたへも五千里。壱万里の道なるを。夜日七日に。行かよひ。みのりをとき給ひけり。かるか故に経文にも。けいやうをふく。としやうはんりとときたまふ　〔コトハ〕かゝる霊法を分こえ給ひけるほとに。東天竺の堺なる流砂の川につかせ給ふ。彼河の広き事は。三百廿余丁なり。水へきてんにひたし。なみばんてんにさかのほり。はやくしてみなきれは。いさごを洗なかせり。りうさの河と書ては。いさごなかさる河とよむ。葱峯の山のふもとにひとつの橋わたれり（8オ）

。石橋と是をいふ。しやつきやうと書ては。石の橋とよむ故に。はりをならべてすのことし。るりをつらねてかうろとす。橋げた柱には。めのうを作りこめてあり。遠く渡りてそれる事。虹をなせるかことくなり見るに肝きえ膝ふるひ　〔カヽルフシ〕足すさましく身の毛たち

〔同〕渡るへきやう更になし。弘法この由御らんして。さりとも是をわたらすは。白雲万里をへたゝり。何としてかは参るべき。渡るにこそと思しめし命を。捨て渡らるゝ。法力なれは。さをいなく（8ウ）むかひに付せ。給ひけり。河上さしてよぢのほりそうれいの。峯のあかりつゝ。はるかの空を詠れは。夕日程もなかりけり。手にとる計ちかくして。霞は谷の底にあり。雷電雲をひゝかし。風しやううんを。はらいて。きんはくは殊に。ちゝんたり　〔コトハ〕懸りける処に。

NII-Electronic Library Service

Nagoya City University

はつせん童子行相て。いつくより何かたへ通るものそと有しかは。弘法聞召れて。是は日試の弘法と申者にて候か。天竺霊鷲山におはします。大聖文珠を拝まん為。是まて参りて候に（9オ）

。霊鷲山への道つたひをしへてたべとおほせける。童子聞し召れて。是より霊山浄土へは。白雲万里をへたゝり。又年を重て歩むとも。いかてたやすく参るへき。はや帰れとそ仰ける。弘法聞し召れて。万里の道も。一足の下よりつゝく事也。心なかくあゆまは。なとか参らて有へきそ。をしへてたへとそ仰ける。童子聞し召れて。汝はけしにたとへたる。粟散国の少僧か。唐土をこゆるたにも有難き事なるに。ましてや申さん天竺を（9ウ）

。歩み尽して参らん事。思ひもよらぬ事なるへし。只かへれとそ仰ける。弘法聞し召れて。国は小国なれ共。名を日試と名付て。日をかたとれる国なり。唐土広しと申せ共。震丹国と名付て。星をかたとる国なり。天ちく其名高けれ共。月氏国と名付て。月をかたとる国なり

〔ツメ同〕国は大小によるへからす唯智恵こそ本にて有へけれ。童子きこしめし。面しろし弘法。ちゑくらへなるならは。いて〳〵さらは参らん。さて弘法は日本より（10オ）

。是迄たつね来れるは。ぐちの僧にあらすや。心の内を尋は。霊鷲山も心にあり。文珠も心の内にあり。胸のほとりに持なから。遠嶋を尋るは。くちの僧にあらすや。弘法聞しめし。をろかなりあの童子。法には事理の二つあり。心の内の文珠は。惣の文殊是なり。霊鷲山の文珠は。別のもんじゆ是なり。別ときらへは惣もなし。惣ときらへは別もなし。事理惣別の不二なるをちゑとは申候らへ。童子聞しめし。詞のしよけん無益なり。めい（10ウ）

よを現して。きとくをみせよもちいん。きとくは何をあらはさん。紙もなく墨もなく。筆もなくして只今。文字を一つかいてたへ。弘法聞しめし。かかんす事は安けれ共。童子のきとく先みせよ。童子聞しめし。いて〳〵さらはかゝんとて。はしる雲にむかつて。阿毘羅吽見とゆびをふる。嵐に雲は早けれ共。文字はちつとも乱れすあざ〳〵とこそ見えにけれ。弘法御覧して。珠勝也あの童。子いで〳〵さらはかゝんとて。流るゝ水のおもてに。たつといへる（11オ）

文字をかく。さしもに水ははやけれ共。文字はちつとも乱れす。帯を結へることくにて。あざ〳〵とこそ見えにけれ。童子御らんして。あの字にてんをうつてこそ。龍とはよまれ候らへ。弘法聞しめし。うたんす事はやすけれ共。龍とならんかゆぶせさに。さてこそてんはりやくしたれ何ほとの事の有へきそ。たゝ打給へこうほういで〳〵さらはうたんとて。ひとつのてんを打給ふ。いまた其手も引ぬまにいかづちなつて雨下り大水出きたつたり。水はなを見（11ウ）

給へは。百色の大竜か頭を高くさしあけ。水に尾をたゝいて。大木小木の枝くだけ岩尾なかれて下る音地しんのゆるかことくなり。弘法御覧して。すはや水よ童子。にげ給へと有しかは。どうじちつともさはかす。こくうにあかり雲をふみさらぬていにて立給ひ。いたはしゝ弘法。にげ給へと有しかは。弘法ちつともさはかす。ばんじやくのいんをむすんで。河のおもてへなげ給ふ廿余丈にそびへたる大般石石と成

NII-Electronic Library Service

Nagoya City University

けれは。其上に飛あかり独鈷をにぎり（12オ）
弘法しはらくねんじゆし給り　〔コトハ〕童子御覧あつて。殊勝なりとよ弘法。今は何をかつゝむべき。我こそ天ちく霊鷲山の文殊なれ。あれにてまたん久しさに。是まて迎ひにきたりたり。いで本躰をあらはさん。うてんわうはなきか。獅子いでこよと有しかは。雲のうちにこゑあつて。おつとこたへて程もなく。こかねの法冠の頭き。せきいにけんをぞはいたり〈ける〉。しゝにはらつてんのくらををき。御まへにひつたつる。童子則もんしゆとなり　〔カヽルフシ〕五しきの（12ウ）
光りをなはしつゝ　〔同〕獅子にめされたりけれは。所は頓て。浄土となる霊山浄土是也　〔サシイロ〕そも〳〵文珠と申は。浄瑠璃浄土の其中に。八代菩薩のそういちなり　〔コトハ〕行者をむかへとりては。極楽世界に送らるゝ。有時は霊山浄土にて。法華の瑞相をとき。又ある時はすなはち。寂滅だうじやうにして。三世諸仏の実儀を立。一念生衆を一衆にし。有相無為のさうをちやくし。しゝの上にしては又。釈尊の右のわきに座（13オ）
し給ひ。一生三昧発起し。弥陀の願をたて給ふ。かゝる有難き文珠を。まのあたりにおかみたまふ。弘法大師の御心さこそうれしくおほすらん。文珠重ての給はく。末世の衆生の迷ひには。うさうしうじやく是多し。うさうといへるこゝろは。万のものをありと見る。是はうさうの迷ひとて。地獄へ落る心なり。又よろつのものをなしと見る。是も談空の迷ひとて。ちこくへおつる心也。只一念ふじやうなるをこそ。文珠のちゑと申て。そつこん仏（13ウ）
になる物なれ。此道をまもつて下向せよとそ仰ける。弘法聞し召れて。あらたつとしや候。御名こりおしうは候らへ共。さらはお暇申とて。それより下向し給へり。葱嶺の山の麓に。ひとつの瀧おちにけり。かの瀧の双岸に。三本の竹おいにけり。もゝよにふしをこめつゝ。此竹千尋成けり　〔カヽルフシ〕弘法釼を抜もつて。彼竹の末のよを。三節こめて切給ひ　〔同〕契りのあらは日本にて。めくりあへやと。の給ひて河。にそながし。給ひける。それよりもとの橋わたり（14オ）
はや太唐に出給ふ。とうどの寺の始は。楊州の。白馬寺殊更たつとかりけり。帰朝の東風のふきけれは。明州に出給ふ。御舟にめす時。もつところの仏具に。五鈷とつこ三鈷をこくうへなげさせ給ひけり。紫雲くたつて。是をまき。はるかの海を分こえて。きの国に聞えたる。高野のみねにとゝまれり。さんこの松と。申事此時。よりもはじまれり　〔コトハ〕独鈷は花の都なる東寺の塔にとゝまる。五鈷は越後の国くかみの寺にとゝまれり（14ウ）
。それよりも大師は。御舟に召れ。のろ嶋ときさみのしまを　〔カヽルフシ〕はるかの西に御らんして　〔同〕ほり川といへるみなとこそ。唐土のわうの。都よりなかれ出たる大河なり。それより三日はしり過。かしらなしといふ津こそ。もろこし舟のとまりなれ。きみしうと。いへる沖洲を過。高麗唐土のさかひなる。もめいしまをはしり過。きやうのみさき。わくたんじゆもころひのみせんもゝしま。きとの嶋もろみの嶋。ふなこし過て。つちよりもあくれはつしまのないに（15オ）

NII-Electronic Library Service

Nagoya City University

つく。ゆきのさかもとはしり過。ゆきのもとをりめにかけて。あわちくせんの箱崎や。はかたの津こそ見ゆれとてをの〳〵。いさむおりからに。悪風俄にふいてきて。かうらいの。沖洲なるきとの。しままて吹もとす　〔コトハ〕大師秘印をむすひ。我また帰朝する事。異法の為にて候らはす。衆生さいとのためなり。順風たへや龍王ときせいをふかく申さるゝ。かゝりける処にひんづら左右にゆうたる童子。波の上にたゝすんて。此風と申は（15ウ）

太唐の仏達の。大師に名こりをおしみたまひ。今一度たいとうへむかへん為の風なれは。龍王のしよいにてあらすやとかきけすやうに失にけり。こうほう聞召れて。其儀にて候はゝ。先日本へつけてたべ。日本につくならは。唐土の寺を学ふへし。金剛峯寺と額をうつて。たいとうの仏達をくわんじやう申あれにておめに懸らんと　〔片ツメ同〕きせいをふかく申さるゝ。梶取ともか是をきゝ。あそこなる法師は。何をいふて咀そしのうず事が目に見えて（16オ）

。ひとりことをいふやと。笑ふものもありにけり誰も命はおしいとてなげくものも有にけり。大師のきせいまことにて追手そ吹にけるとかや。過にし柏武。天皇の御時。三十七にて。入唐まし〳〵さて又四十七のとし。嵯峨の帝の御時御帰朝とこそきこえけれされとも人はなとやらんしらさりけるそふしきなる。つくしのはかたに打あかりふちおいとつてかたにかけ都へのほり給ひしか旧里は忍ひあるにより。讃岐の国に渡り。屏風の浦に（16ウ）

立より。父母の御基をふしおかみある礒辺をとをらるゝより竹ひとつあり。取あけ御覧ありけれは天竺流砂河にてきりなかしたる竹であり。きたひふしきにおほしめし。三つのよの有けるを。三ふしにきさみ。笈のあしにゆい付。都へ上り給ひしか三ふしの竹のよにいれは五音のこゑをいだす五音のこゑと申は。宮商角徵羽是なり。三くわんの笛にえり給ふ大ずいれうこすいれうあを葉のふゑ是なり。青葉のふゑと申は。竹は塩に（17オ）

かれたれと青葉は一つふしにありかれさるとくに名付たり。こすいれうと申を。朱雀院の鬼かとりよな〳〵ふいてあそひしを天人是をとらんとて。羽衣をもつて。なてゝは天にあかり。なでゝは天にあかり。かるか故に名付つゝ。ひとへかくしと是をいふ此三くわんの笛をは。天下の重宝なりとて。内裏にこめをかれしを。さころもの中将の。吉野山にて。花見のけうの有し時。このふゑを申請ふいてあそはれたりけるに。まんしゆらくを（17ウ）

ふきしかは天人是を聴聞し五すいのくをのかれてぼさつとなつて舞あそふ。其後に中将。淀の津に住ゐせし。小式部にたひにけりこしきぶとし老てのち。弥陀次郎か祖父の。みた太郎かこれをとり我々までは三代なり。ふく事はなけれ共。此ふゑをもちぬれはさいなんさらにきたらす仏神のかごに預るてうほうにて候をいかなる人の申けん。かみさまにきこしめし。召置れ候らへはちからにをよひ候らはす若きみとこそ申けれ（18オ）

。うし若きこしめし。面白し弥陀次郎いわゐに三度かたれとて。おしかへしかたらせ。猶もあかすやおほしけん草紙にとゝめ給ひて。ふゑ

NII-Electronic Library Service

Nagoya City University

のまきと申て。くらま馬にありとかや。其後にみた次郎なんれうを給はり家路にとてそかへりける（18ウ）

【校異】

本曲の校異に使用した諸本は次のとおり。（内）内閣文庫本、（毛）毛利家本、（松）松村本、（慶）慶応大学蔵伝小八郎本

5オ　○さる間洞幸の阿闍梨。ときわの御まへにまいり―（慶）去間とうくわうあまりのふしんさに供の下女をちかづけいかなる人にてましますとくわしくとわせ給へば下女承よしともの御だい所雲のうへの常葉御せんにてましますとありのまゝにそ申ける別当おほきにおどろきときわの御前にかしこまり　○まいり―（内・毛・慶）かしこまり　○おほせけれ―（内）申されたれ、（毛・松）まふされけれ、（慶）申さるゝ　○あり様―（内・毛）案内　○半なりしとき―（慶）三ごんとみえし時　○いかにや洞幸―（慶）ナシ　○別当に参らする―（慶）ナシ

5ウ　○草切とも―（慶）わらわ共　○みなし子にてさふらへは―（内）憐人なくしてはいかてかかなひ侍らふへきみなし子にてさふらへは、（毛・慶）あはれむ人のなくしてはいかてかかなひさふらふへき　○頓而れうぢやうを申させ給ひ―（慶）御返事迄も候らはすいそげどうしゆくどもとて　○二字を教ゆるれは百字にくらからす―（慶）ナシ

6オ　○習ひそ尽し給ひける―（慶）書こそしるし給ひけれ　○かゝるめいよの―（慶）是にましたる　○六はらにおはしますときわつたへきこしめし―（慶）常葉きこしめされて　○其中にとりわき―（内・毛・慶）その中にとつても　○一の物―（内・毛・慶）一の名物　○買とつて―（毛）もとめ、（慶）かいとり鞍馬へのほせ　○淀の津の―（慶）よどのあたりなる

6ウ　○ある時うし若殿―（慶）うしわか心におほしめすそれ人のもつたからのゆらゐをきかねばなにならず　○さん候と申―（慶）さん候と申すいかにみだ次郎　○みた次郎承―（慶）みだ二郎うけ給りかしこまつて申すさん候

7オ　○此ふゐと申は一とせ―（慶）この笛は　○てんしうの沖―（内・毛・松）だいしうのおき、（慶）大州のうち　○国には―（内）国に八十の

8オ　○行かよひ―（内・毛・松）行帰り　○経文にも―（内・毛・慶）釈文にも　○広き事は―（慶）とをき事　○なかさる河―（他本）なかるゝ川

8ウ　○しやつきやうと書ては石の橋とよむ故に―（慶）ナシ　○はりをならべて―（慶）るりをならへて　○はりをつらねて―（慶）はりを連て　○弘法この由御らんして―（慶）ナシ　○何としてかは参るべき―（慶）いかでたやすくまいるべき

9オ　○詠れは―（他本）見あぐれは　○弘法聞召れて―（内・毛・松）ナシ

NII-Electronic Library Service

Nagoya City University

9ウ　○へたゝり又―（内・毛・松）へだゝりぬ、（慶）へだゝりて
　○有難き事―（内・毛）尊き事
10オ　○唐土広しと申せ共震丹国と名付て星をかたとる国なり―
　（松）ナシ　○其名高けれ共―（慶）なをもひろけれど
10ウ　○胸のほとりに―（慶）我か身のうちむねのほとりに　○ちゐ
　とは申候らへ―（内・毛・松）あふ智者とは申候そ、（慶）ちしや
　とは申候えそ
11オ　○童子聞しめしいて〳〵さらはかゝんとて―（慶）さらばかく
　とのたまひて
11ウ　○帯を結へることくにて―（慶）ナシ　○いで〳〵さらはうた
　んとて―（慶）さらばうつとのたまひて
12ウ　○殊勝なりとよ弘法今は何をかつゝむべき―（内）あらたつと
　しや弘法、（毛）あらたつとしや弘法今は何をかつゝむへき、（慶）
　あらたつとしやこうぼう我をは誰とか思ふらむ　○我こそ天ちく―
　（慶）ナシ
13オ　○極楽世界に―（内・毛）極楽浄土へ　○三世諸仏―（他本）
　三世諸法　○有相無為のさう―（内・毛）無相無実のさう
13ウ　○末世の衆生の迷ひには―（慶）ナシ　○心なり―（内・毛）
　はしめ也　○心也―（慶）しるしなり
14オ　○あらたつとしや候―（内・毛）ナシ、（慶）あらありがたや
　候　○御名こりおしうは候らへ共―（慶）ナシ
15ウ　○ゆきのさかもと―（毛）いきのかさもと　○たゝすんて―
　（慶）かしこまり
16オ　○龍王のしよいにてあらすやと―（毛・松・慶）龍王のしよい
　ならすとて、（内）まつたく龍王のしよいならすと申て　○つくな
　らは―（内・慶）着物ならは、（毛・松）つくほとならは　○唐土
　の寺を学ふへし―（慶）ナシ
16ウ　○四十七のとし―（内・毛）四十三のとし　○忍ひあるにより
　―（慶）しのひ給ひ
17オ　○ひとつあり―（慶）一つありにけりあやしくおほしめされ
17ウ　○ふいてあそひし―（他本）是をふきしを
18ウ　○其後にみた次郎―（慶）其時のほうろくに　○なんれうを給
　はり―（内）なんりやうあまた給りみた次郎はよろこひ、（毛）御
　褒美にあつかりみた次郎も怡、（松）なんりやう五つ給はり、（慶）
　なんりやう五つたひにけり

（文学）

去間源氏御世に出させ給ふへき瑞相共こそおほかりけれ。其ゆへいか
にとたつぬるに。津の国渡辺源氏の太将。遠藤武者とうふさか其子。
遠藤瀧口守遠と申せしか。出家しての戒名を文学とこそ申けれ。其比
あらさる大行をくわたて。真言教にこゝろをかけ。極熱のあつきに笠
をもきすけんとうのさゆる夜。ふすまの数をもかさねす。大峯葛城を
七度まて通り。熊野の那智の瀧に三七日うたれ。正身の大聖明王（1
オ）

NII-Electronic Library Service

Nagoya City University

に相奉りしかは。すでに権者とこそ聞えけれ。其後みやこへのぼり。愛宕山の麓。高尾の神護寺と申す古寺に御座あり。かゝるばうゑいぶつかくを。建立せんこそ本望なれ。先しゆろ建立あるへしとて。洛中洛外を勧進してまはられしか。院の御所法住寺とのに参り。是はたかをじんごしの。かねつきたうの勧進にまいりて候。御奉加あれと申て。くわんじんちやうを文学はたからかにこそよまれけれ　〔カヽルフシ〕比は卯月（1ウ）

上旬の事なるに　〔同〕をそさくら。ちる木のしたは。寒からて。空にしられぬ。卯の花の雪はお庭にちりしきて。山郭公むら雨に。ぬれて。さ渡るおりふしに。雲上の管絃かうは。なかはなり　〔コトハ〕上臈達は御らんして。そう〳〵なり後日に参れ。御奉加あるへしとの宣旨なり。文学うけたまはり。なに雲上の管絃講とや。せうちやくきんくご。びわねうどうのあそびは一旦の栄花。鐘つきたうの勧進は来世のためにて候へし。たゝ〳〵（2オ）

管絃をとゝめ。御奉加あれと申て。又勧進帳を文学はたからかにこそよまれけれ。上臈達は御覧して。そう〳〵なりあのほつし〈を〉。追出せとありしかは。承ると申て。おくぢもしらぬあを侍か。一度に座しきをはらりとたつて。文学のもたれたる。くわんじんちやうをひんばうて。ふたつみつにひつさいて。かしこへかはとなけ捨　〔ツメ同〕又取て引立て門のあたりへ追出す。文学御覧して。抑これは何事そ。いなならは幾度も。そのよしを（2ウ）

こそ云へきに。なんそもんかくに。黒衣の上の恥辱を。あたふる所はいこんなり。よく〳〵物を案するに。千手の二十八部しゆ薬師の十二神将とがうさんせ。くだりやしや明王のかうまのりけんを。引さけて悪魔を退治し給ふに。なんそ文学か。たいしたる此釵は。いつのれうそとおほしめし。うす染のころもの袖を。くる〳〵とくり上て。めてのわきよりも。氷のやうなるけんをぬき。おつふせ〳〵さすほとに。青侍を七八人。時刻うつさすさしころす（3オ）

。四門の武士ともあつまつて高手こてにいましめて庭にこそはひつすゑけれ　〔コトハ〕上臈たちは御覧して。こは音にきこえたるぼつかうものゝもんかくなり。いにしへもかかる悪事をして。出家しぬるときゝしか。なをしその心のうせさる事のふたふさよ。うんきをはねよときせらるれは。すでにしざひにをよひけり。され共法皇よりの宣旨には。たとへはあの法師こそ。はかひの者にてありとも。いかにとしてけだつどうさうの。種々の（3ウ）

法衣を身にまとひたらんものを。つるきのさきにはかけさすへき。只々七条大路にどくつをかまへおとし入。百日を待へし。百日過ばほりおこし。あとをはとふてえさせよと。院宣あれは官人等。すきくわを持て出　〔カヽルフシ〕七条にしの洞院に　〔同〕二丈五尺に。土穴を堀て。文学を落し入。上には土をはねおゝい。百日日数を。送りしは実哀なる。次第なり　〔コトハ〕十四五日打過。文学のいられたる。籠のあたりにこゑ有て。いかに此内のひじり（4オ）

ひじりと召るれは。文学承り。かやうにどこつにこめてのち。といくる人もなかりしに。一向に我を。うしなへとの宣旨により。尋ぬるそ

NII-Electronic Library Service

Nagoya City University

と心得。ぢよくあく世中成間それとてもちからなし。候とこそこたへけれ。いや〳〵別の子細にてなし。ひゑいざん中堂薬師。いわうぜんぜいよりの仰には。あらむさんや文学は。はかいのものとは云なから。あらさる大行をくわたて。いまたその願成就せす。今一度たすけをき。諸願を成就せさせんため。十二神の中（4ウ）

よりも。ごんびらだいじやうお使なり。どくつのくらき事あらは。瑠璃のつほをえさするそ。つほの光りてらして見よ。食事の望のあるならは。薬を服して命をつけ。それ給はれよもんかくと。けにあてやかなる御手にて　〔カヽルフシ〕瑠璃のつほをそたまはりける

〔同〕実とくらき暗をは。壺の光りて照しけり。食事ののそみのある時は。薬を服して命をつく。何に。その身のをとろふへき。やせすくろます。もんかくは日数を送り。給ひけり　〔コトハ〕又十四五日（5オ）

打過。文学のいられたる。籠のあたりにこゑ有て。いかに此内の聖々と召るれは。候とこそこたへけれ別の子細にてなし。中堂薬師の仰には。左様に土窺にこもらんよりも。我か前にきたり。御経よみ（だらに）をみて。百日を待へしとの仰にて候そ。文学承り。か様にどくつにこもりては。何としてかは出さふへき。ごんびら大きに腹を立。さやうの心中によつてこそ。懸るむみやうのくをはうくれ。神通自在たるへくは。なとかたやすく出さるへき。文学（5ウ）

実もと思召し。ゐたる所をづんとたつと思へは。その身はけしのことくにて　〔カヽルフシ〕出られけるこそ殊勝なれ　〔同〕さてごんびらと。打つれて。中堂やくしに参りつゝ。経よみだらにをみて給ひて。明ぬくれぬと。せし程にはや。百日に。成にけり　〔コトハ〕まんじける夜半に。かたしけなくも御本尊は。御帳の内よりもあらたにみこゑを出させ給ひ。いかにもんかくきくかとよ。日数もけふは百日と覚るそ。いそき籠帰り。御尋にあふへきなりとそおほせける（6オ）

。文学承り。又本のどくつにこもられけり。法皇よりの宣旨には。有し時のもんかくを。土の籠に入たるか。日数もけふは百日と覚ふるそ。いそき堀おこし。跡をはとふてえさせよと。院宣あれは官人等。すきくわを持て出。どくつをあけて見てあれは。痩もせずくろみもせず。いとゝけしきはあてやかに　〔ツメ同〕につことわらつて出られけれは官人きもをつぶしつゝ東西へはつとそにけにける。文学御らんして。何とてどうてんし給ふそ。これは（6ウ）

有し時の。聖にてはなきかと。もんかくに力を付られて。漸々こゝろをとりなをし文学を守護し奉り法住寺殿へそ参りける　〔コトハ〕上臈たちは御らんして。御目を見合舌をまいてそおぢられける。法王えいらんまし〳〵て。殊勝なりとよもんかく。さるたとへのあるそとよ。愚者のつくる善は善ともにつみ。智者の作るつみは。罪ともに善とは今こそ思ひしられたれ。今日よりして文学上人とふせをくへし。去なから有し時の勧進（7オ）

帳をたゝ今。聴聞せんとの宣旨なり。もんかくうけたまはり。時刻うつしてかなはしと思ひ。持たるあふきをはらりとひらき。たか〳〵とさし上て。又勧進帳をもんかくはたからかにこそよまれけれ　〔カヽ

NII-Electronic Library Service

Nagoya City University

ルヨミモノ〕沙弥文学敬白。ことにはきせんだうぞくの助成を蒙て。高尾山の霊地に一院を建立し。二世安楽のたいりを勤行せしめんと乞くわんじんの状。それおもんみれは真如広大なり。成仏のけみやうをたつといへと。ほつさふずいまふの雲あつく（7ウ）おゝつて。十二因縁の峯にたな引しよりこのかた。ほんうしんでんの月の光りかすかにして。いまた三どく四まんのたいきよにあらはれす。かなしきかなぶつにつはるかにぼつして生死流転のちまた。みやう〳〵たり。たゝ色にふけり香にふける。たれかけうざうてうゑんのまとへをしやせん。いたつらに人をはうじほうをはうず。これあにえんらごくそつの責をまぬかれんや　〔同〕こゝに文学たま〳〵。ぞくじんを打払てほうゑをかさるといへと（8オ）。悪行猶こゝろに。たくましうして日夜に作りしぜんへう又。耳にさかつて朝暮にすたる。いたましきかな二度三途のくわきやうにかへつてなかく生死のくりんを。めくらさん事を。此故に無二のげんしやうせんばんぢくぢく〳〵に。ぶつしうのいんをあらはしずいゑんしじやうのほう。ひとつとして。ぼたひのひぐわん〈に〉。いたらすといふ事なしかるかゆへにもんかく無常の。くわんもんになんだを落し上下の。しんそくをすゝめ上品。蓮台に（8ウ）あなうらをはげましてとうみやう。かくわうの。れいぢやうをたてんとなりそれ高尾は。山うす高ふしてじゆふうぜんの梢を表し谷。しつかにしてしやうさんとうのこけをしげりがんぜん。むせんで。布を引れいえん。さけんでえだをあそぶじんり。とをふしてきやうちなししせき。ことなふしてしらんのみありちけい。すくれたり尤。ぶつてんを。あかむへし奉加すこしきなり。たれか助成せさらんほのかにきく。じゆしやいんぶつたうくとく。たち（9オ）まちに。ふつにんをかんずいはんや一紙。半銭の。ほうざいにをいてをやねかはくは建立。成就してきんげつほうりき御ぐわんゑんまんないしとひ。ゑんきんりんみんしんそげうしゆんぶいの。くわをうたひちんによ。さいくわいのゑみをひらかん殊には又。しやうりやうゆふひぜんごん大小。すみやかにかならす一仏しもんのうてなにいたり三じん。まんどくの月をもてあそばん。仍勧進執行のをもむき。けだしもつてかくのごとし。治承三年（9ウ）三月の日。文学坊とそよみ上けるかのもんがくの勧進帳をほめぬ人こそなかりけれ　〔コトハ〕ほうわうゑいらんまし〳〵て。殊勝なりとよ文学。はや〳〵まかりかへり。よきに建立つかまつれ。御奉加あるへしとの宣旨は面目とこそ聞えけれ。され共諸卿一同にそうし申されけるやうは。かゝるはかひの犯科人を。さしもをかせ給ひなは。狼藉国にあまりなん。死罪をはやめられ。流罪させられ候らはゝいしかりなんとそ申されける。法皇ゑい（10オ）ぶんまし〳〵て。とも宗盛かはからひとて平家かたへそ渡されける。宗盛なゝめにおほしめし。福井の庄のしも使。次郎大夫有玄に仰付。伊豆の大しまの。観音たうへ流されしは。是そこの平家の運のすゑとそ聞えける。法皇よりの宣旨には。かまへてもんかくを。本道をは叶ましい。熊野の難をおしまはし舟路たるへしとの宣旨なり。承ると申

NII-Electronic Library Service

Nagoya City University

て。上下卅六騎にて。文学を守護したてまつり法住寺とのをそ出に（10ウ）

ける　〔クトキ〕あらいたはしやもんかく。みやこの名こり今はかりとやおほしけん。七条辺に立出。ひがしをはるかに御らんすれは。音羽の山の松風に　〔フシ同〕をのれと。きんやしらぶらん。麓におつる瀧つほは。名に知られたる清水寺。本尊は千手せんげん。にやくがせいくわんの御つかひむたし給はすは。もんがくか此度の。遠流の罪をなためつゝ。今一度都へ。返し給へときせいして。西をはるかになかむれは。丹波においの山。谷の堂峯のだう。さが法林寺（11オ）

うづまさの薬師に猶も。名こりあり。北には鞍馬せきさん。鬼門にあたつて比叡山。中堂薬師の十二神。さてわか山の十二神。ごんびらだいしやう七千のやしや。北野を拝し奉り。文学か。此度の遠流の罪をなためつゝ。二度帰洛つかまつり。多年ののそみの願ともを。成就せさせてたび給へと。みなみをはるかになかむれは。八幡山に。たつきりの石清水にやかゝるらん。かひとくげだつぐせいりき。金剛八幡ねかはくは。源氏をまほりて（11ウ）

たび給へと。きせいを申させ給ひつゝ。しづが作り道。鳥羽殿のさんざうを。よそなからふしおかみ。形部左衛門なにかしが。其きうせきをみてあれは石ずへのみや。のこるらん。念仏申経をよみ。その幽霊をとふらひて。淀の津につきけれは。はや河舟にのせられて。水に任せてなかれ行。弓手を遥になかむれは。琴の音しらふる禁野の里。かのかのさいこ中将のましろの鷹を手にするゑし。かた野の原の。かり衣今きて見るそ。よしなき。馬手は（12オ）

山さきせきどの院。たれかたてけんたから寺。ひなをそたつる。とりかいのかふりの。里は是かとよ。ゑのぐはげたる古仏。はや渡辺に着ければ。海上遥に梶をとり。追而のかせに帆をあげて。波路はるかに。ふかれ行心。さしこそ哀なれ　〔コトハ〕文学心におほしめす。哀源氏のよなりせは。かほとの罪によつてよも遠嶋へはなかされじ。是も平家のやつばらか。ちやうくわするによつてなり。これより伊豆の大しままで。なん十日にもつかばつけ。源氏をまほるしるしに。食事（12ウ）

を服すましいとおほしめし。舟底につつといり。まくら取て引よせ。打ふし給ひて其後。おきもあかり給はす又。寝入給ふ事もなし。ふしなから宣ひけるは。こゝはいつくを通るそ。天王寺の沖と申す。さては仏法最初の天王寺にて御座有けるや。異国にてはなんかく大師。我朝にては聖徳太子。さりとも仏法がたのもんがくを。よもすてはては給はしな。こゝはいつくを通るそ。住吉さかひうぢの湊。和哥吹上や玉津嶋。布引の松（13オ）

君井寺。藤白たうげゆらのみなと　〔カヽルフシ〕きりべの王子ちりのはま　〔同〕みなべたなべの。沖過てなちの沖とそ。申ける。文学聞し召れて。われ此御山に参り。三七日は。瀧にうたれ。正身の。大聖明王に。相奉りし其時ははや。権者とこそ思ひしに。何とおこなひ。なしたる文学か行ぞや。爰はいつくぞはまのみや。さのゝ松原たゆふの松新宮のみなといだの里。伊勢の国志摩の国。尾張三河の。沖過て

NII-Electronic Library Service

Nagoya City University

天龍のなだに（13ウ）

。つき給ふ　〔コトハ〕此なだと申は。東国一の悪所なり。富士の高根に白雲か。二なみ三なみさつとかかる。水主梶上是を見て。あわ風よおそろしや。みつなわをといてほごもをおろせ。ほはしらをたてなをせと。いへる時刻もなかりけり。いせの国。くつか颪といふ風か。まん十文字に吹たりけり。熊野なる新宮颪はうしろにふく。一かたならす四五方より。もみ合たる風なれは　〔ツメ同〕枯木は枝をおろし。もくよくをあらひ。草のねをかへして。上る浪は（14オ）

ひとへに。けふりのたつかことくなり。四方の風か一度にはつと。もみ合てふく時は。今は此舟かなふへき様あらされは。かたはらを立てくるり〳〵とまはりけり。守護の武士かんどり共。こゑをそろへて一同に。南無阿弥陀仏と申せとも。舟の内なる文学はなにおもふたけしきもましまさすそらいびきかいてそふされける。しゆごのぶし梶取共。此よしを見るよりも。あらふたふのあのひじりや。たとひ便船なんとにて。のつたりと申共。かかる（14ウ）

かうはのなんあらは。御経よみだらにをみて。龍神納受の。きたふなんともあるへきに。此沖にてわれ〳〵か。しせんする事共はあのもんかくゆへと覚てあり。舟底よりも引出して。海へ入んといふもあり。又あるかたの異見には。私ならぬ文学なれはいかゝはせんといふもあり。か様に色々申けるを。聖はきこしめさるれとも。いよ〳〵きかぬていをしてそらいびきかいてぞふされける。かゝりける処に。ともうつなみかあまつて。もんかくの（15オ）

つぶりを。ざつと打てぞ通りける。其時もんかく腹を立。ふしたるところをかつはとおき。舟のへいたにつつ立上り。大音上て。如何に此沖を上人かとをるをしらぬかゑい。さこそ流人といひなから。龍王まてもあなづつて。此なみ風をたつるか。大龍めかわざか。小龍めか態か。雨風やめぬものならは。竜王とはいふましきそ。文学分入て。ためしをたつてくれうぞえい。龍わうめ〳〵とぞいかられける　〔コトハ〕かかりける処に。びんづら左右に（15ウ）

ゆふたる。童子一人浪の上にうきあかり。龍宮のをと姫にこひさいによとはみつからなり。上人の通りありし由承。津の国渡辺よりも。付そひ申てさふらへとも。舟底に御寝有て。御出ある事さらになし。かくて大崎の御堂に上らせ給ひては。いつの世にかは拝み申へきと存知。此なみ風をたて。上人をおかみ申事の有難さよ。さあらはこうはの風やめて。参らすへしと申て。海底に入と見えけれは　〔カヽルフシ〕今まてあれてさはがしき　〔同〕やみ（16オ）

うみのおもて。へい〳〵として。追手の。風の吹けれは。しゆごの武士かんとり。上人を礼し奉り。ろかひ梶をたてなをし。かせに任て吹すれは。みやこを立てもんかくは。伊豆の大嶋まて。五十五日に着給ふに。食事をとゝめ。給ひしは源氏を守る。しるしなり　〔コトハ〕かくて大さきの御堂に上らせ給へとも。あたりのうら人まいりたつとみ申事更になし。何としてかはちかつかんとおほしめし。さうげふのほうをおこなはせ給ひ。過つるかた八十日。こうずるかた八十（16ウ）日を占はせ給へは。あたりの浦人参りたつとみ申事かきりなし。ひる

NII-Electronic Library Service

Nagoya City University

が小嶋におはします。頼朝つたへ聞しめし。めのとの盛長を召れ。まこと哉覧大崎のみだうにこそ。都よりうけんちとくの御ひじり御下向あり。さふげふのほうを行なはせ給ふか。露ほともちかはぬよし承る。いさや参りて御占ひとつ申さんとて。主従お舟に召れ。観音堂にあからせ給ひ。うしろだうのゑんの板をとう〳〵とふみならし給ふ。折ふしもんかくは高座にあかり（17オ）

給ひ。つとめ半の事なるに。うしろだうのなつたるをきこしめし。御弟子の学文坊を召れ。只今うしろだうのなつたるを。聖ふしんに思ふなり。とをくは百日。ちかくは廿日の其内に。日本国のあるしと。なるへき人の足音と聞つる事のふしきさよ。頼朝きこしめされ〈て〉。是に過たる事あらし。いざもとらんとそ仰ける。盛長承り。かゝるうけんちとくの聖に御対面あり。猶も行末の。めてたかるへき事共を。御尋候らへかしと申けれは。頼朝実もと（17ウ）

思召し。つとめの一座過る程うしろ堂に立せ給ふ。漸々勤も過けれは。聖高座よりおりさせ給ひ。たゝ今の客人こなたへと仰けれは。よりとも座敷になをらせ給ふ。もんがく御らんして。ふしきや御身は誰人そ。いつそや平治の春の比の流されものにて候。扨は義朝に三男頼朝にてましますか。さん候と仰けれは。扨も御身の父義朝のなれる姿か見度候か。見たく候とも見たからすとも中々申計もなし。いで〳〵さらは（18オ）

見せ申さんと。笈取て引よせ。上旦の内よりも。錦七重につゝみたる。しやれたる首をとり出し。是こそ御身の父義朝のなれる姿よ。見給へと仰けれは。頼朝聞召れて。更にまことゝおほしめさす。さあらぬていにもてなしそば成机にをき給ふ。文学御らんして。道理なり頼朝。程ふりたる事なれは。うたかひさためて有へし。扨も義朝長田に討れさせ給ひ。御首上り獄門に懸り。昼は日に照され。よるは雨露に打れ（18ウ）

。後には地に落。人馬のひつめに懸りつべかりしを。もんかく余りのいたはしさに。夜半に紛れて盗取。百目だんにておこなひ。今まて持て候とて。机なる頭に向て。義朝。〳〵と仰けれは。それかあらぬか御こゑかすかに聞えけれは〔クトキ〕其時頼朝御袂にうけ奉り。生たる人に向ひて物をの給ふことくに。いかに候ちゝごぜん。にし坂本迄は御供申て候らひしか。くらさはくらし雪はふる追をくれ申。草野といへる山里にかくれて年ををくり。春にも（19オ）

ならは御あとを。たつね申てまいらんと思ひ候ところに。おもひもよらす郎等にうたれさせ給ひ。御くび上り獄門にかからせ給ふよしをきゝ。今はいのちもおしからずみやこへのほり今一度ちゝの御くび一目見て。もしも命なからへは。さまをもかへて御菩提をとい申さんとおもひつゝ〔フシ同〕忍ひて京へのほりしに。いま河原といふところにて。弥平兵衛にいけどられ。うき六波羅へ渡されて。六でうかはらにてすでに。死罪に及ひしを。池の（19ウ）

にこうにたすけられ。此国へなかされて。廿余年の春秋を。送りむかへて過行と。すこしも父の御事をは。忘れ申事もなく。恋しくおもひ申せしに。いのちのうちに御すかたを。見まいらせぬるうれしさよ。

NII-Electronic Library Service

Nagoya City University

あれはすけか文珠かと。今一度おほせ候らへとて。御顔におしあてゝ。りうていこかれ給ひけれは。もんかくもがくもんも。さて御供の。盛長もこゑを。上てそなきにける　〔コトハ〕文学御覧有て。なみたをかけぬ御事なり。それこなたへとの給ひて。又本（20オ）のことくに取おさめ。いかにや頼朝。御こゝろやすくおほしめせ。もんかくがあらんほとは。平家調伏すへしとて。十二ケ条の巻物を書こそ尽し給ひけれ。そも〳〵十二ケ条と申は。第一に天地のきたう。第二に国王のきたう。第三に仏神のきたう。第四には源氏のきたう。第五には。源氏をまもる衆生のきたう。かくのことくの五ケ条は。五体五形の五節の祝を　〔ツメ同〕あらはす所なり。今残る七ケ条は。平家をうしなひほろほすへき調伏の（20ウ）七ふしぎを。あつむる七つの数なりけり。此巻ものはすなはち。頼朝の是まて。来たりたまへる唯今の。引出物とてまいらする。頼朝なゝめにおほしめし。三度いたゝきまほりにかけ。万事は頼奉る。いとま申てさらはとて。又御舟にめされて。なこやの御所へそかへられける。是そこの源氏の繁昌のはしめときこえけり　〔コトハ〕其後文学は白木のこしをこしらへ。みなみおもてにかきすへ。こくうに向ての給ひけるは。たゝ今こそもんがく（21オ）上洛つかまつれ。こしかきまいれとありしかは。いつくからとも知らさるに。力者二人きたつて。御輿をかいて。こくうへあかると見えけれは　〔ツメ同〕せつなが間に王城の祇園はやしにつき給ふ。昼は人目をしのひつゝ。四てうの町に立出て。数のくもつを買あつめ。七重にたなをゆい。百八十ほんの。へいくしをきりたて数の。人形をたてならへ。平家の人々の。名字名のりをかきしるしてうぼくのほうをおこなはるゝ。三七日にまんする（21ウ）日。中旦上だん下旦百八。十本のへいぐしの。一度にはつとみたれあひ。むねとの平家のうんかくの。御くびきれて明王の。りけんにかゝると見えしかは一ほうは成就したりとて旦をやぶつて出たまふ。さてこそ寿永の春の比。平家都をおとされて。亡びはてさせ給ひしは。もんがくのいきとをり。ふかきゆへとそ聞えける（22オ）

【校異】

本曲の校異に使用した諸本は次のとおり。（内）内閣文庫本、（毛如）毛利家如滴本、（毛片）毛利家片仮名本、（直）直熊本、（慶）慶応大学蔵伝小八郎本

1オ　○去間―（内・慶）抑、（毛如・毛片・直）爰に　○御世に出させ―（内・慶）御代を開かせ　○津の国―（他本）もとは摂津国　○大行をくわたて―（内・慶）大願を起し

2オ　○上旬の事なるに―（内・慶）上旬に　○との宣旨なり―（内・慶）とそ仰ける、（毛如・毛片・直）との御諚なり

2ウ　○あれと申て又―（内・慶）あれと申　○を文学はたからかにこそよまれけれ―（毛如・毛片・直）をそよまれける　○ありしかは承ると申て―（内）仰けれは承ると申て（「承ると申て」ヲ、ミ

NII-Electronic Library Service

Nagoya City University

セケチニスル)、(毛如・毛片・直・慶) 仰ければ　○一度に座しきをはらりとたつて―(内・慶) 十四五人はらりとたつてそう〳〵なり後日に参れ御奉加あるへしとの仰にて候をさゝへて (慶)「をさへて」) まいりらうせきをいたすところはきつくわいなりいそき出よと云まゝに　○ふたつみつにひつさいて―(内・慶) 七つ八つに引さいて、(毛如) ナシ (「二つ三つにひつさいて」ト傍書)　○門のあたりへ追出す―(内・慶) いや門の傍へ出にけり

3オ　○くだりやしや―(内・慶) ナシ　○うす染の―(他本) 薄墨染の

3ウ　○庭に―(他本) 庭上に　○され共―(毛如・直) ナシ　○たとへはあの法師こそ―(内・慶) たとへは文覚こそ、(毛如・直) たとひあの沙門こそ、(毛片) 縦い沙門こそ　○いかにとして―(内・慶) ナシ

4オ　○まとひたらんものを―(内・慶) まとひたる者をいかにとして　○あとをは―(内・慶) けふやうしあとをは　○いられたる―(内・慶) 籠られたる

4ウ　尋ぬるそと心得ぢよくあく世中成間―(毛如) 尋ぬる事にて有けるか、(毛片・直) 尋る事にてありけるか濁悪世中なる間　○大行をくわたて―(内・慶) 大願をおこし　○中よりも―(内・毛如・直・慶) 其中に

5オ　○お使なり―(内・慶) 御使に参りたり　○薬を服して―(内・慶) とてもつほに薬をいれて得さするうへ薬をふくして

5ウ　○文学のいられたる―(毛如・毛片・直) ナシ　○いかに此内の―(毛如・毛片・直) ナシ　○別の子細にてなし―(毛如・毛片・直) ナシ　○御経よみ〈だらに〉をみて―(内・慶) 経読念仏申

6オ　○夜半に―(内・毛如・直・慶) 暁　○いそき罷帰り―(内・慶) 人の心を破は菩薩の行にもれたるわさはや〳〵まかりかへり、(毛如・毛片・直) はや〳〵罷帰り

6ウ　○文学承り―(内・慶) 文覚承りかしこまつて候とて　○もんかくを―(他本) 聖を　○跡をはとふてえさせよと院宣あれは―(内・慶) 教養し跡をはとうて得させよとりんけんあれは、(毛如・毛片・直) 教養せよとのせんしなり承つて

7オ　○上臈たちは御らんして御目を見合舌をまいてそおぢられける―(内・慶) ナシ　○殊勝なりとよもんかく―(毛如・直) ナシさるたとへのあるそとよ―(内・慶) 爰にたとへの候そ　○善ともにつみ―(内・慶) せんともにつみなり、(毛如・毛片・直) せん共に悪なり

7ウ　○たゝ今―(他本) 唯今よめ　○うけたまはり―(他本) 承りくはんしんちやうはあらはこそ　○いへと―(内・慶) いへと未

9オ　○しらんのみあり―(内・毛如・慶) 信心のみあり、(毛片) 四神耳あり、(直) 四神の耳あり

10オ　○やめられ―(内・慶) なためられ　○申されける―(内・慶) 申されけるかゝりける所に右大将宗盛すゝみ出て申されけるはあはれをなしう候はゝなにかし申たまはつて伊豆の三嶋 (慶)「見

NII-Electronic Library Service

Nagoya City University

崎」）の観音堂へなかしうしなふへしとそ申されける

10ウ　○とも―（内・慶）ともかくも　○仰付―（内・慶）仰付させ給る、（直）仰付させ玉い　○伊豆の大しまの―（内）伊豆の三嶋の、（慶）伊豆の見崎の、（毛如・直）伊豆の大崎の

11オ　○七条辺に―（内・慶）六条辺に　○ひがしをはるかに御らんすれは―（内・慶）東の方を御覧すれは　○たる清水寺―（慶）コレヨリ以下、17ウ「いざもとらんと仰ける盛長承」マデ、ナシ）

○御つかひむたし―（内・毛如）おんちかいもらし、（毛片・直）御誓もだし

11ウ　○成就せさせてたび給へと―（内）しやうしゆせさせたまへやときせいを申させ給ひつゝ

12オ　○みてあれは―（内・毛如・毛片・直）見わたせは　○石ずへのみやのこるらん―（内）いとゝ涙はせきあへす

12ウ　○ゑのぐはげたる古仏―（内）ナシ　○伊豆の大しままで―（内）伊豆の大崎まて　○つかばつけ―（内）ゆかはゆけ

13オ　○さりとも―（内・毛如・毛片・直）衆生さいとのしひふかしさりとも

14オ　○白雲―（内・毛如・毛片・直）黒雲　○四五方より―（内）四方より　○もくよくをあらひ―（内）ナシ

14ウ　○あらされは―（内）あらすして　○守護の武士かんどり共―（毛如・直）船中の者共　○おもふた―（内）うれいた

15オ　○かうはのなん―（毛如・毛片・直）風波のなん　○覚てあり―（内）おほふるなり、（毛如・毛片）覚たり

15ウ　○上人か―（内）文覚か　○いひなから―（内）おもひて　○大龍めかわざか小龍めか態か雨風―（内）浪風　○竜王とは―（内）龍宮とは　○いかられける―（内）いかられけるかの文覚の心中は人にかはつておほへたり　○びんづら左右にゆふたる童子一人浪の上にうきあかり―（内）十四五なるとう女なみの上にかしこまりしやうにんの方をふしをかみあらありかたや候われをは誰とかおほすらん

16オ　○童子―（毛如・毛片・直）天女　○うきあかり―（毛片・直）浮あがり上人の方を伏拝み　○上人の通りありし由承―（内）しやうにんなみの上をおとをりあるよしをうけたまはりひとめおかみ申さんため、（毛如・毛片・直）貴き上人の御通り有よし承はり　○さはがしき―（内）すさましき

16ウ　○食事をとゝめ給ひしは―（内）食事をとめてふくせぬは　○かくて大さきの御堂に―（毛片・直）角て御船よりもあがらせ玉い大崎の御堂に　○上らせ給へとも―（内）あからせ給へは都のけいこは御いとまを申てそのほりける角て大崎の御堂に御座有けれとも、（毛如・毛片・直）まし〳〵けれ共　○たつとみ申事更になし―（内）しやうにんをたつとみ申事もなし、（毛如）たつとみ申事もなし　○何としてかはちかつかん―（内）いかにとしてかれらをちかつけむ　○過つるから八十日こうずるかた八十日―（内）こうするかた八十日すきにしかた八十日

NII-Electronic Library Service

Nagoya City University

17オ　○参りたつとみ―（内）まいりしやうにんをたつとみ　○ひるが小嶋におはします―（内）伊豆の田中に御座有兵衛介　○召れ―（内）めして仰けるは　○まこと哉覧大崎のみだうにこそ―（毛如・毛片・直）直やうけたまはれは大崎の御堂にこそ　○御下向あり―（内）御くたりまし〳〵て、（毛如・毛片・直）おくたり有て　○露ほとも―（内）すこしも　○観音堂に―（内・毛如・毛片・直）大崎の御堂に

17ウ　○うしろだうのなつたるをきこしめし―（内）ナシ　○只今うしろだうの―（内）いかに覚文きくかとよたゝいまうしろたうのえんのいたの　○とをくは百日―（内）しかんをもつてかんかうるに　○是に過たる事―（内）あらめてたの御うらやこれにましたること、（毛如・毛片・直）是にましたる　○とそ仰ける盛長承―（慶）11オ「たる清水寺」カラ、コレマデナシ

18オ　○座敷に―（内・慶）はやく御座に　○扨は―（内・慶）さる事有、（毛如・毛片・直）あふさる事有　○ましますか―（慶）「ましま」以下、二三字分虫食。丁ガカワリ「御身の父義朝」ト続ク　○仰ければ―（内）ナシ　○見度候か―（内・慶）みたくさうらふかと問給へは

18ウ　○笈取て引よせ―（毛如・毛片・直）ナシ　○上旦の内よりも―（内・慶）上段より、（毛如・毛片・直）笈の上段より　○しやれたる首―（慶）どくろ　○見給へと仰ければ頼朝聞召れて更にまことゝおほしめさす―（内・慶）見たまへとてたひにけりほとふりたる事なれはさらにさそともおほしめさす、（毛如）見給へとてたひ給ふ頼朝御覧してさらに真とおほしめさす、（毛片・直）見給へとてたび玉う頼朝御覧じてほどふりたる事なれば更に真と思しめさず

19オ　○うけ奉り―（内・慶）いけまいらせ高〳〵とさしあけ　○追をくれ申―（毛如・毛片・直）さかり松のあたりにてをひをくれ

19ウ　○御あとを―（内・慶）御ゆくえを　○おもひもよらす―（内・慶）おもひの外に　○かからせ給ふよしをきゝ―（内・慶）かゝれるよしをきくよりも　○今はいのちもおしからずみやこへのほり今一度ちゝの御くび一目見て―（内・慶）せめてかはらせ給ふ御すかたをなりとも見まいらせ、（毛如・毛片・直）せめてかはらせ給ひたる御姿を成共見まいらせ　○といふところにて―（内・慶）にて

20オ　○此国へ―（内・慶）此嶋に　○忘れ申事もなく―（内・慶）わすれ申ひまもなく　○こゑを上てそなきにける―（内・慶）みなみたをそなかしける

20ウ　○いかにや頼朝御こゝろやすくおほしめせ―（内・慶）いかに頼朝聞召、（毛如・毛片・直）いかに頼朝　○もんかくかあらんほとは―（他本）文覚かあらんほとは御こゝろやすくおほしめせ　○書こそ尽し給ひけれ―（内・慶）かきこそしるしたまひけれ　○国王のきたう―（毛如・毛片・直）国王　○仏神のきたう―（毛如・毛片・直）仏神

NII-Electronic Library Service

Nagoya City University

21オ　○あつむる―（内・毛片・慶）あらはす　○すなはち頼朝の是まて来たりたまへる唯今の―（内・慶）たゝいま頼朝これまての御出の、（毛如・毛片・直）則頼朝の今日来り給へる只今の　○いとま申てさらはとて―（内・慶）さらはおいとま申とて　○たゝ今こそもんがく―（内・慶）文覚こそたゝいま

21ウ　○こしかきまいれとありしかは―（内・慶）こしかきやあるいそきまいれと仰けれは、（毛如・毛片・直）輿かきまいれと仰けれは　○きりたて―（内・慶）けつり　○平家の人々の名字名のりをかきしるし―（内・慶）ナシ

22オ　○中旦上だん―（内・慶）上段中段　○きれて明王の―（慶）以下最後マデナシ　○春の比―（内）秋の比　○おとされて―（内）落されついにいくさにかたすして　○ふかきゆへ―（内・毛如・毛片・直）こはきゆへ

NII-Electronic Library Service